

目次

【2012年 聖書講筵レジュメ（配付資料等）】

2012年

2012年4月 キリスト道講演会 引用句

2012年4月（奈良）

ヒルティ『眠られぬ夜のために（第一部）』1月（岩波文庫）要約と解説

奥田昌道 選

ヒルティ『眠られぬ夜のために（第一部）』2月～3月（岩波文庫）

奥田昌道 選

ヒルティ『眠られぬ夜のために（第一部）』4月～6月（岩波文庫）

奥田昌道 選

ヒルティ『眠られぬ夜のために（第一部）』7月～10月（岩波文庫）

奥田昌道 選

2012年6月 ヒルティ『眠られぬ夜のために（第一部）』の根本思想（総括）

2012年6月23日（東京新宿）

「真の幸福とは」（ヒルティ『幸福論 第三部』）

ヒルティ『幸福論 第三部』1899年の「二つの幸福」からの抜粋

（ヒルティ著作集第三巻、1959年、白水社、前田護郎・杉山好 共訳）

奥田昌道 選

2012年7月 夏季福音特別集会（京都）のご案内

2012年7月1日（京都）

2012年8月 夏季福音特別集会 講筵資料

2012年8月24～26日（京都）

2012年11月 サムエル記上 解説

2012年11月11日（東京新宿）

（主として、『口語 旧約聖書略解』による）



聖書引用句

2012年4月 キリスト道講演会

2012年4月 (奈良)

ペトロの手紙一1:1~25 (新共同訳)

「イエス・キリストの使徒ペトロから、ポントス、ガラテヤ、カパドキア、アジア、ビティニアの各地に離散して仮住まいをしている選ばれた人たちへ。²あなたがたは、父である神があらかじめ立てられた御計画に基づいて、³霊⁴によって聖なる者とされ、イエス・キリストに従い、また、その血を注ぎかけていただくために選ばれたのです。恵みと平和が、あなたがたにますます豊かに与えられるように。」

◆生き生きとした希望

³わたしたちの主イエス・キリストの父である神が、ほめたたえられますように。神は豊かな憐れみにより、わたしたちを新たに生まれさせ、死者の中からのイエス・キリストの復活によって、生き生きとした希望を与え、⁴また、あなたがたのために天に蓄えられている、朽ちず、汚れず、しほまない財産を受け継ぐ者としてくださいました。⁵あなたがたは、終わりの時に現されるように準備されている救いを受けるために、神の力により、信仰によって守られています。⁶それゆえ、あなたがたは、心から喜んでいるのです。今しばらくの間、いろいろな試練に悩まねばならないかもしれませんが、⁷あなたがたの信仰は、その試練によって本物と証明され、火で精錬されながらも朽ちるほかない金よりはるかに尊くて、イエス・キリストが現れるときには、称賛と光栄と誉れとをもたらすのです。⁸あなたがたは、キリストを見たことがないのに愛し、今見なくても信じており、言葉では言い尽くせない素晴らしい喜びに満ちあふれています。⁹それは、あなたがたが信仰の実りとして魂の救いを受けているからです。

¹⁰この救いについては、あなたがたに与えられる恵みのことをあらかじめ語った預言者たちも、探求し、注意深く調べました。¹¹預言者たちは、自分たちの内におられるキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光についてあらかじめ証しされた際、それがだれを、あるいは、どの時期を指すのか調べたのです。¹²彼らは、それらのことが、自分たちのためではなく、あなたがたのためであるとの啓示を受けました。それらのことは、天から遣わさ



れた聖霊に導かれて福音をあなたがたに告げ知らせた人たちが、今、あなたがたに告げ知らせており、天使たちも見て確かめたいと願っているものなのです。

◆聖なる生活をしよう

¹³だから、いつでも心を引き締め、身を慎んで、イエス・キリストが現れるときに与えられる恵みを、ひたすら待ち望みなさい。¹⁴無知であったころの欲望に引きずられることなく、従順な子となり、¹⁵召し出してください。聖なる方に倣って、あなたがた自身も生活のすべての面で聖なる者となりなさい。¹⁶「あなたがたは聖なる者となれ。わたしは聖なる者だからである」と書いてあるからです。

¹⁷また、あなたがたは、人それぞれの行いに応じて公平に裁かれる方を、「父」と呼びかけているのですから、この地上に仮住まいする間、その方を畏れて生活すべきです。¹⁸知つてのとおり、あなたがたが先祖伝来のむなしい生活から贖われたのは、金や銀のような朽ち果てるものにはよらず、¹⁹きずや汚れのない小羊のようなキリストの尊い血によるのです。²⁰キリストは、天地創造の前からあらかじめ知られていましたが、この終わりの時代に、あなたがたのために現れてくださいました。²¹あなたがたは、キリストを死者の中から復活させて栄光をお与えになった神を、キリストによって信じています。従って、あなたがたの信仰と希望とは神にかかっているのです。

²²あなたがたは、真理を受け入れて、魂を清め、偽りのない兄弟愛を抱くようになつたのですから、清い心で深く愛し合いなさい。²³あなたがたは、朽ちる種からではなく、朽ちない種から、すなわち、神の変わることはない生きた言葉によつて新たに生まれたのです。²⁴こう言われているからです。

「人は皆、草のようで、その華やかさはすべて、草の花のようだ。草は枯れ、花は散る。

²⁵しかし、主の言葉は永遠に変わることがない。」これこそ、あなたがたに福音として告げ知らされた言葉なのです。」(ペトロ一1:1～25)

ペトロの手紙一4:7～19

「万物の終わりが迫っています。だから、思慮深くふるまい、身を慎んで、よく祈りなさい。⁸何よりもまず、心を込めて愛し合いなさい。愛は多くの罪を覆うからです。⁹不平を言わずにもてなし合いなさい。¹⁰あなたがたはそれぞれ、賜物を授かっているのですから、神のさまざまな恵みの善い管理者として、その賜物を生かして互いに仕えなさい。¹¹語る者は、神の言葉を語るにふさわしく語りなさい。奉仕をする人は、神がお与えになった力に応じ



て奉仕しなさい。それは、すべてのことにおいて、イエス・キリストを通して、神が栄光をお受けになるためです。栄光と力とが、世々限りなく神にありますように、アーメン。

◆キリスト者として苦しみを受ける

¹²愛する人たち、あなたがたを試みるために身にふりかかる火のような試練を、何か思いがけないことが生じたかのように、驚き怪しんではなりません。¹³むしろ、キリストの苦しみにあずかればあずかるほど喜びなさい。それは、キリストの栄光が現れるときにも、喜びに満ちあふれるためです。¹⁴あなたがたはキリストの名のために非難されるなら、幸いです。栄光の霊、すなわち神の霊が、あなたがたの上にとどまってくださるからです。¹⁵あなたがたのうちだれも、人殺し、泥棒、悪者、あるいは、他人に干渉する者として、苦しみを受けることがないようにしなさい。¹⁶しかし、キリスト者として苦しみを受けるのなら、決して恥じてはなりません。むしろ、キリスト者の名で呼ばれることで、神をあがめなさい。¹⁷今こそ、神の家から裁きが始まる時です。わたしたちがまず裁きを受けるのだとすれば、神の福音に従わない者たちの行く末は、いったい、どんなものになるだろうか。

¹⁸「正しい人がやつと救われるのなら、不信心な人や罪深い人はどうなるのか」と言われているとおりです。

¹⁹だから、神の御心によって苦しみを受ける人は、善い行いをし続けて、真実であられる創造主に自分の魂をゆだねなさい。」（ペトロ一4：7～19）

ペトロの手紙二3：8～13

「⁸愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。⁹ある人たちは、遅いと考えているようですが、主は約束の実現を遅らせておられるものではありません。そうではなく、一人も滅びないで皆が悔い改めるようにと、あなたがたのために忍耐しておられるのです。¹⁰主の日は盗人のようにやって来ます。その日、天は激しい音をたてながら消えうせ、自然界の諸要素は熱に熔け尽くし、地とそこで造り出されたものは暴かれてしまします。¹¹このように、すべてのものは滅び去るのですから、あなたがたは聖なる信心深い生活を送らなければなりません。¹²神の日の来るのを待ち望み、また、それが来るのを早めるようにすべきです。その日、天は焼け崩れ、自然界の諸要素は燃え尽き、熔け去ることでしょう。¹³しかしわたしたちは、義の宿る新しい天と新しい地とを、神の約束に従って待ち望んでいるのです。」（ペトロ二3：8～13）



コリントの信徒への手紙一10・13

「¹³あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。」(コリント一10・13)

ヤコブの手紙1・2～4

◆信仰と知恵

「²わたしの兄弟たち、いろいろな試練に出会うときは、この上ない喜びと思いなさい。³信仰が試されることで忍耐が生じると、あなたがたは知っています。⁴あくまでも忍耐しなさい。そうすれば、完全に申し分なく、何一つ欠けたところのない人になります。」(ヤコブ1・2～4)

ヤコブの手紙1・12

◆試練と誘惑

「¹²試練を耐え忍ぶ人は幸いです。その人は適格者と認められ、神を愛する人々に約束された命の冠をいただくからです。」(ヤコブ1・12)

ローマの信徒への手紙5・1～11

「¹このように、わたしたちは信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストによって神との間に平和を得ており、²このキリストのお陰で、今の恵みに信仰によって導き入れられ、神の栄光にあずかる希望を誇りにしています。³そればかりでなく、苦難をも誇りとします。わたしたちは知っているのです、苦難は忍耐を、⁴忍耐は練達を、練達は希望を生むということを。⁵希望はわたしたちを欺くことはありません。わたしたちに与えられた聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからです。⁶実にキリストは、わたしたちがまだ弱かったころ、定められた時に、不信心な者のために死んでくださった。⁷正しい人のために死ぬ者はほとんどいません。善い人のために命を惜しまない者ならいるかもしれませんが。⁸しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。⁹それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたのですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。¹⁰敵であつたときでさえ、御子の死によって神と和解させていただいたのであれば、



和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。¹¹ それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです。」（ロマ5：1～11）

ローマの信徒への手紙8・18～39

「¹⁸現在の苦しみは、将来わたしたちに現されるはずの栄光に比べると、取るに足りない」とわたしは思います。¹⁹被造物は、神の子たちの現れるのを切に待ち望んでいます。²⁰被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。²¹つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。²²被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、わたしたちは知っています。²³被造物だけでなく、²⁴「霊」の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。²⁴わたしたちは、このような希望によって救われているのです。見えるものに対する希望は希望ではありません。現に見えているものをだれがなお望むでしょうか。²⁵わたしたちは、目に見えないものを望んでいるなら、忍耐して待ち望むのです。

²⁶同様に、²⁷「霊」も弱いわたしたちを助けてくださいます。わたしたちはどう祈るべきかを知りませんが、²⁸「霊」自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださるからです。²⁹人の心を見抜く方は、³⁰「霊」の思いが何であるかを知っておられます。³¹「霊」は、神の御心に従って、聖なる者たちのために執り成してくださるからです。³²神を愛する者たち、つまり、御計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働くということを、わたしたちは知っています。³³神は前もって知っておられた者たちを、御子の姿に似たものにしようとあらかじめ定められました。それは、御子が多く兄弟の中で長子となられるためです。³⁴神はあらかじめ定められた者たちを召し出し、召し出した者たちを義とし、義とされた者たちに栄光をお与えになったのです。

◆神の愛

³⁵では、これらのことについて何と言ったらよいだろうか。もし神がわたしたちの味方であるならば、だれがわたしたちに敵対できますか。³⁶わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはずがありませんか。³⁷だれが



神に選ばれた者たちを訴えるでしょう。人を義としてくださるのは神なのです。³⁴だれがわたしたちを罪に定めることができません。死んだ方、否、むしろ、復活させられた方であるキリスト・イエスが、神の右に座っていて、わたしたちのために執り成してくださるのです。³⁵だれが、キリストの愛からわたしたちを引き離すことができません。艱難か。苦しみか。迫害か。飢えか。裸か。危険か。剣か。

³⁶「わたしたちは、あなたのために一日中死にさらされ、屠られる羊のように見られている」

と書いてあるとおりです。³⁷しかし、これらすべてのことにおいて、わたしたちは、わたしたちを愛してくださる方によって輝かしい勝利を収めています。³⁸わたしは確信しています。死も、命も、天使も、支配するものも、現在のもものも、未来のもものも、力あるものも、³⁹高い所にいるものも、低い所にいるものも、他のどんな被造物も、わたしたちの主キリスト・イエスによって示された神の愛から、わたしたちを引き離すことはできないのです。」（ロマ8・18～39）



要約と解説

ヒルティ『眠られぬ夜のために 第一部』(岩波文庫) 1月

奥田昌道 選

1月1日《偉大な思想に生きる。キリストの言葉そのものを》

たえず偉大な思想に生き、ささいなことを顧みないように努めること。これが、人生の多くの苦渋と心配事を最もたやすく乗り越える道である。

最も偉大な、しかも同時に最もわかりやすい思想は、キリスト教の神信仰である。奥田の注…ここにいう「思想」とは、「考え方」といった程度の意味。多くの人は、信仰とは「考え方」程度にしか思わない。「私は、ひたすら、キリストの導き、護りを信じ、キリストにすべてを委ねて生きています」と告白すると、返ってくる答え(応答)は、「そんな風に考えられたら、楽でしょうね。」であった。信仰は、リアリティであり、断じて、思想とか考え方といった次元のものではない。

あなたが人生の幸福を心から望むなら、キリスト教をその源泉において、福音書、とりわけキリストみずからの言葉のなかに求めよ。

1月2日《ヨハネ福音書15・7に目を留めよ》

ヨハネ15・7は、聖書全体の中で最も注目すべき言葉である。

大切なことは、「キリストに堅く結ばれていること、キリストの言葉の中に生きていること」。キリストは常に父なる神と一如一体であった。父なる神の愛の中に生き、そのみ旨を第一として生きられた。だから、キリストの祈り、願いは、ことごとく聞き届けられ、即刻成就した。この父なる神との一如一体の霊的現実を、キリストと私たち一人ひとりの関係において成就しようとなさっているのが、キリストの祈りであり、み旨である。命がけのキリストのご愛に、本気で応えよう。本気で、このみ言葉に依拠して祈り求めよう。

「汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に隨いて求めよ、

さらば成らん。」(ヨハネ15・7)

1月3日《人生の唯一の目標》

人生の唯一の、道理にかなった目標は、地上に神の国を、つまり、不和と生存競争の国ではなく、平和と愛の国を築くことである。この事業に協力するかぎりにおいて、われわれの生活は目的と価値とを得ることになる。ひとはだれでも、活動することや苦難に耐えることで、この事業に参加することができる。

今の現実、世界も国内も、「不和と生存競争」が横行し、その対極である「平和と愛」は、言葉で語られ、あるいは叫ばれていても、実現には程遠い。地上における「神の国」とは、



「平和と愛の満ちた国」であるとヒルティは言う。その実現に向って参画するかぎりにおいて、われわれの生活(人生)は目的と価値を得るのだと言う。しかも、この事業への参加は、見える形での活動に限らず、「苦難に耐える」ことも、それに劣らず価値ある参加だと言う。ヒルティは、『幸福論 第三部』の「忍びうる者に勇氣あり」の論説(126頁以下)において、「苦難」の積極的な意義について詳しく論じている。これを読めば、「苦難」にあることを嘆くことなく、勇氣をもつて進んでいくことができる。病気についてもそうである。上の論説に続く「病人の救い」と題する論説(159頁以下)において、懇切丁寧に、病気は決して不幸ではない、病氣を通して人はそれ以外では得られない貴重な経験、尊い導きを得ることができること、「健康でなければ何事もできず、義務も果たせないというふうな、現代人の意気地のない、窮屈な考え方を捨てること」を奨めている。

たえずなにか有益な仕事をし、あせつたり、心配したりしないこと。また、われわれが出会う事柄やわれわれの気分を、つねにみずから支配し、決してそれらに支配されないこと。これが、いつも年の初めにいづくべき正しい生活のプログラムである。しかしこのプログラムが実行できるのは、われわれが万物の主と親密に強く結びつき、その導きに無条件に従おうと決心する場合にかぎる。そうでなければ、どんなに賢いどんなに強い人でも、周りの人間や状況にもてあそばれて、たえずそれに抵抗して身を護るだけが関の山となる。こうして、年と共にかさむ、ささいな、しかも骨の折れる雑事のために、人生は一つの重荷となり、ついにはその重荷の下にひしがれて、まちがはなく、そしてたいていは、悲惨な破滅に陥るのである。

あまり働きすぎではならない。また一般に、秩序ある暮らし方をすれば、その必要もない。一方、適度な仕事は、力を維持する最上の方法であり、また非活動的な力やたるんだ力を救う唯一の、無害な刺激剤でもある。

1月4日『二つの人生観の選択』

「どうしたらすばらしい、愉快なことが楽しめるか」ではなく、「今どんな善いこと、正しいことをなし得るか」をたずね、この究極の目的のためにどのような自分の状態を改めたらよいかをたえず問うこと、これが決定的に大切なことだ。

この二つの人生観こそ、宗教と階級にかかわりなく、すべての現代人を分かつ真実の大きな区別である。これにくらべれば、あらゆる他の区別はほとんど意味がない。

現代の日本は、「愉快な楽しいこと」の追求が最大の目標のようである。TVのさまざまな番組、グルメ志向、料理番組(おいしくいただくことはいいに決まってはいるが、あまりにもそれに傾斜しすぎてはいないか。)などなど。「善いこと、正しいことの追求が大切なのだ、たとえ、多少の苦痛や忍ぶべきことが増えようとも」という気風が国民の間に広がるならば、

政治上の不毛な対立・抗争も無くなるだろう。政治家は、国民のご機嫌取りに躍起となっている。選挙目当てのために。国民が、賢く、忍耐強く、高い理想と見識を持たねば、日本は沈みゆくばかりである。

1月5日《苦しい出来事においては、まず感謝を》

苦しい事件に出会ったときは、まず、それについて感謝に値する事柄をさがし出し、それを率直に感謝しなさい。そうすれば、心に一層安らかな気分が生じ、気持ちが落着くと、その他の事も堪えやすく思われてくる。たえずこれを練習していると、しだいに良い習慣となつて、人生がたいへん楽になる。

われわれが完全に神の導きに身をまかせるならば、どうにもならない多くの事柄に対して、高貴な無関心を会得することができよう。しかしこの「軽やかな心」を得るには、神をかたく信じ、その命令に必ず従うことが前提である。

1月7日《人を赦すことの難しさと解決策》

われわれを侮辱するすべての者をゆるしてやれとの教えは、われわれみずからの経験によつても、その正しさが確かめられる。執念深い憎しみは、内的生活をむしばみ、憎しみの相手よりも憎しみをいだく当人の心を害うものである。けれども、時には、即時にすっかりゆるすことが困難なこともある。

こういう場合は、しばらく、復讐をやめて、神におまかせする方がずっとよい。神はまちがいなく、ちょうど適当な時機にそれを成し遂げてくださる。人間にはこの方が辛抱しやすい。そして、傷つけられた感情も、時がたつにつれて、また神の恵みによつて、しだいに宥められるものである。

たとえ心のなかだけでも、決して人といさかいをしてはならない。

1月8日《苦難に耐えることによる勝利》

「いま、わたしは、この苦しみを耐え忍ばなくてはならない。けれども、いと高き者の右の手が、やがて、すべてのものを変えてくれるであろう」(詩篇

77・10のドイツ語訳)。

あなたが願うすべてのことが、ただちに実現するわけではない。その前に、あなたや他の人びとの内部で、なお多くのものが成長し強化されねばならないし、たとえ恩寵の奇跡によつて行われる場合でも、ある程度までは自然の道順を経てそれは行われなければならない。また、あるものを手に入れることだけが、自分の感情にとつてかけがえのない主要事ではない。あるものを取得できるという確信、固い信仰は、すでに得られた所有にほとんど劣らぬものである。

1月9日《善人に訪れる苦難と慰め》

善人はこの世で多く苦しまねばならない。これは避けられないものだ。だから、甘んじてそれに従いなさい。

慰めは苦しみのすぐ傍らにある。これは、神が、ほかのだれよりも、このよう
なみずから進んで苦しみを耐え忍ぶ人びとのそば近くにいられるということであ
る。

このような慰めがなければ、だれもあの「狭い道」を歩みえないであろう。す
でに多くの人が大きな苦しみの中にありながら、この慰めを得て幸福であった。

1月13日《地上における天国の始まる時》

地上における天国は、人間が絶えず神のみことろと合一することよりほかに、
もはやなにものをも熱望しなくなつた時から始まる。来るべき天国も、それ以外
のものであるはずがない。同じように、このような心境に到達しない人間が、天
国へ入るのにふさわしく、そこで心地よく感じようとは、理屈から言っても考え
られないことだ。

ヒルティは、天国(死後の輝く世界、神・キリストの臨在したまう世界)とこの世(地上の世界)は、
連続的なものだとして確信している。われわれの周りには、地上でどんなにいい加減な、ある
いは神のみ旨に反するような生活を送っていても、死んだら直ぐに、天国、光の国、平安
と喜びと希望、真の命にあふれた世界に入ることができる、と考えている人が多いようだ。
それは大いなる誤謬であり、甘い錯覚にすぎないことをヒルティは論ず^{さし}。わたしも、全く
その通りだと思う。みんな、もつと天国、死後の生活の事を、真剣に考えるべきだ。そこ
から初めて、この世での苦難や、人生の真の生き方、人生の意義、大切さが分かつて来る
はずだ。大人たちは、そして年老いた者たちは、もつと、このことを後に続く者たちに語
り伝えるべきだ。それには、大人たちが目覚めなければならぬ

1月14日《つねに前を見ること、この世の命の彼方にあるものまでを》

後ろを見ないで、つねに前方を見なさい。最後には、この世の命を超えて彼方
を見なさい。後を振り返るのは、何の益にもならない。生き方を改めるために、
あるいは、失敗を繰り返さないために、または、ひとから受けた恩誼に感謝をも
つて報いるために、という場合は別であるが。

1月15日《聖職者の標準》

次のような偉大な宗教的能力(賜物)のいずれかを備えていること。すなわち、
慰めの、効果ある祈りの、病気の治癒の、罪の許しの、預言の、より正確に言う
ならば、現在と未来に対する正しい洞察の、または真理の霊の、賜物を備えてい
ることである。

いつの時代にも、またどの民族にも、自己とこの世との縁を絶ち、自分自身の
ためにはなんの願望をも持たず、ひたすら正しい道で人を助けるためにのみ生き
る幾多の人がいる。これこそ真の「聖職者」である。

1月16日《神の恩寵にあずかっている事実の証明》



神の恩寵にあずかっている事實は、普通、次の二つの事ではつきり認められる。まず第一に、往々全く突然、何らの外的原因もなく現われてくる超地上的な喜びによつて。しかし一層確かなしるしは、そういう人が、エゴイズムと結びついた事柄では決して成功せず、むしろ困難なこと、常ならぬ事では不思議と立派に、しかもたやすく成功することである。

1月17日《内的成長過程》

真の内的生活に達する場合、個々の魂が自らの内に経験する成長の過程は、普通の次の通りである。

まず第一に、不満足な世俗的努力から転じて神を、悪や無関心から転じて善を「仰ぎのぞめ」という段階である。

次には、「まず神の国を求めよ」、すなわち、なによりも先ず、他の努力の片手間でなく、あるいはそれと同時になく、求める段階である。

それに続いて、すべて本来に必要なもの、ひとを益するものは、つねに必ず得られるという確信が生じる(ヨハネによる福音書15・7、16・24)。

そのようにして最後に生じるのは、絶えざる内的平和(平安)とこの世の克服である。実際この世には、どんな恵まれた運命にあつても、不安と心労しか存しないのだ。ヨハネによる福音書16・33。

人生は絶えざる克服か、もしくは屈服である。地上においては、いかなる人間にもそれ以外の道はありえない。

1月21日《神との交わり、祈りの秘訣》

神との交わりには、特別の時刻や時期(朝夕など)や姿勢や身振りなどを全然必要としない。反対に、最も簡単な言葉、あるいはただ心に思うだけで十分である。いろいろな外的な用意(原文では、「多くの外面的な催し」)はかえつて妨げになることが多い。最も大切なのは、われらの主と絶えず心のつながりを持つことである。

ヒルティのこの奨めは、きわめて大切であり、心を安んじさせてくれる。宗教家(キリスト教の指導者たち)は、往々、祈りに関して、難しい注文を付ける。それが出来ない、不信仰だの、熱心さが足りないだのと言つて、われわれを苦しめる。「最も簡単な言葉(主よ、主様!)、あるいは、ただ心に思うだけで十分である」とは、何たる慰めであらうか。「最も大切なのは、われらの主と絶えず心のつながりを持つことである」と。全くアーメンである。

祈りは単純、かつ誠実に、少しも形式にこだわらずに、なされねばならない、それだけでなく、なお祈りに対する神のお答えを聞くことができなくてはならない。そのためには、日常の騒々しさや利己心に少しも妨げられない、微妙な(繊細な)心の耳が必要である。

祈りに対する神の答えを聞くということは、何も直接、音声で、あるいは、心の耳で聞く、



ということのほか、心をそれ(祈り求めたことと神の側からの応答)に向けている生活の中で、何か思い当たること、ああこれがお答えなのだな、と感じる事でもよいと私は思う。実際、私は直接、神のみ声を聴いたとか、お答えを聞いたとかの経験がないからである。しかし、確かに私は神の導きの中にあることを疑うことができない。

1月22日《朝、目覚めた時の思いの大切さ》

朝、目覚めると同時に真つ先に意識にのぼる考えが何であるかは、非常に大切である。あなたは、その時々「気分」に身を任せるか(それは、さまざまな偶然の原因から起こる)、それとも、あなたの生活の手綱をしっかりと自分で握るつもりか。今日もまた、早速、目先の心配や苦勞から始めるか、それとも新しい命の朝に対する感謝から始めるか。神との結びつきを新たにしようとするか、それとも、自分だけの力で「生存競争」を再開するつもりだろうか。どちらにするかで、その日の運命は決まるのである。

1月25日《おそれは、正しくないことのしるし》

おそれは、つねに、何か正しくないことのしるしである。その正しくないものを探し出して徹底的に克服しなさい。そうすれば、おそれは苦しいものではなく、むしろ正しい生活への道しるべとなる。

ヨハネの第一の手紙 4章18節以下。

「愛には恐れなし、全き愛は恐れを除く、恐れには苦しみあればなり。恐れる者は、愛いまだ全からず。」

とある。

われわれは人間として完成すべき義務を負っている。そのために必要な力と洞察は、正しく求めさえすれば、得られるものである。

「¹⁸愛には懼なし、全き愛は懼を除く、懼には苦難あればなり。懼るる者は、

愛いまだ全からず。¹⁹我らの愛するは、神まづ我らを愛し給うによる。」(ヨハ

ネ一4・18〜19)

1月27日《科学と宗教》

神が何であるかは、人間のどんな学問でも、それが神学、哲学、その他なんと呼ばれようと、それを学問的に究明し、定義することはできないであろう。

そこで、神が実在すること、そして完全と慈愛とが神の本質であるという事実で、われわれの地上生活には十分でなければならぬ。その上、神は、われわれの行いを裁く点でも、われわれが想像する以上に、いやそれどころか、われわれが望む以上に、無限に偉大であることをわれわれは疑わない。われわれは神を把握することも、定義したり公式的に表現することもできない。だが、神を愛することはできる。そうして出エジプト記20・5〜6および34・10においてすでに古代イ

スラエル民族に約束されたことを経験することはできる——これは今日でも当時と全く同様に経験しうることである。

1月30日《愛という言葉の代わりに、人間に対しては同情が、神に対しては信頼と感謝が正しい感情である。》

愛というのは、人をあざむきがちな、あるいは少なくともしばしば実行しがた
い言葉である。人間に対しては同情が、神に対しては信頼と感謝が正しい感情で
ある。すべての人間を本当に愛したいと思っても、それはなかなかできないこと
であり、ただ大きな幻滅と、最後にはペシミズム陥るだけである。だれにでも親
切で、だれにも同情を寄せ、決して憎しみや恐怖や怒りを抱かないということな
らば、それはできよう。

愛のない人としきりに交わるのは、魂をそこなうものである。だから、やむを
えない場合は、むしろ交際を減らすか、それとも全くそれを絶つべきである。

同情心が欠けているということは、女性の場合、重大な性格上の特徴となる。
そういう特徴を認めたら、その人に用心するがいい。また人間に対する過度な愛は、
女性にとって最ものがれがたい落とし穴である。

1月31日《真の幸福とは》

われわれは、すでにこの世において次のような幸福を知らなければならぬ、
すなわち、どんな事情の下でも、また、だれでもみな、手に入れることのできる
幸福がそれであり、そして、われわれの状況が他の点でどのようであろうとも、
つねに喜びをもつて心を満たしてくれるような幸福である。

経験上から言うと、このような幸福をもたらすものは、ただ神への信仰、神の
そば近くあることの実感、および有益な仕事だけである。すくなくとも私はこれ
以外に確実な方法を知らない。また私の知る限りでは、これ以外の道を発見した
者はこれまでまだ一人もいないのである。

参考…2月13日《幸福への道》

何事が起ろうと、すべては神の御手から授けられるものと信じ、もはやいろい
ろと思い煩うことなく、ただ開いた門を通って行くならば、その人の人生はす
でに幸福になりはじめたのである。

「神のかたわらにあること」、すなわち人間の魂に神の霊が「宿る」こと、これ
こそ本当に魂の幸福となるのである。神の霊の宿りは、それをこの世のあらゆる
財宝にまして重んじるならば、まだきわめて不完全な魂にも起りうるが、そうい
う決意がなければ、もつと完全な魂にもそのことは起らない。

要約と解説

ヒルティ『眠られぬ夜のために（第一部）』（岩波文庫）2月～3月

奥田昌道 選（要約）

2月1日《神に対する誠実さ》

われわれの側で徹底的に誠実であるべきこと。冷たい無関心や、ただ義務を果たすだけの形式主義は許されない。現代の教会の大きな欠陥はこの点にある。

2月2日《キリストの犠牲の死とわれらの浄化》

キリストの味あわれた苦難と死は、われわれが出会うはるかに小さな事柄（苦難）に対して我々も同様に行い、かつ耐えることができるようにと導く。

しかし、キリストの犠牲の死（十字架上の死）がひとりでに（自動的に）我々を浄めるわけではない。それを感謝をもってお受けすること、そしてキリストと神とを愛するようになることが、我々を浄化するのである。

2月4日《愛の源泉の必要性》

愛なき世に愛を増やすには、そしてエゴイズムを減らすには、「別の心」が上より与えられなければならない。

2月7日《生活の中での聖霊の重要性と、キリストの言葉と行いを大切にすること》

福音は働く人たちに元氣を与える（働かない人、怠け者は別のもので満たそうとする）。

2月9日《人生の幸福》

それは、困難がないとか、少ないことではなく、あらゆる困難と戦って勝利することにある。

2月10日《試練を喜ぶように》

「主よ、助けたまえ」の祈りで十分。試練は必要以上に長続きはしない。

2月11日《内的な進歩に必要な二つのもの》

それは、われわれに話しかける声と、それを聞くことのできる耳である。

2月12日《地上における幸福と喜びを求めて》

それは正しく求めれば得られるもの。キリスト者は「慰めの子」であるべきこと。

2月13日《幸福の始まりから真の幸福への道》

何事が起ろうと、すべては神の御手から授けられるものと信じ、いろいろと思いつくことなく、ただ開いた門を通って行くなれば、人生はすでに幸福になりはじめたのである。



「神の傍らにあること」すなわち、人間の魂に神の霊が「宿る」こと、これこそ本当に魂の幸福となるのである。この世のあらゆる財宝にまして「神の霊の宿り」を重んじるならば、それは起りうる。

2月15日《見えない世界を「信じて」歩むか、日常の世界を「見て」歩くか》

同一の外的状況の下でも、どちらの歩み方をするかにより、絶望に沈むか、平安で幸福でいられるか、決定的に異なることになる。

2月16日《神への依存・信従か人への依存・隷属か》

信仰によらない世間的な生き方からは、恐怖と気晴らし、見せかけの幸せしか得られない。そして人間の奴隷となってしまう。真の生きた信仰は常に多くの喜びをもたらすので、神の命令（求め給うところ）は軽いものに映る。

2月18日《神の「親愛」こそ信の源泉》

神の「親愛」こそ、本当に我々に尊敬の念を起させ、我々を信服させる唯一のものだ。神の「怒り」はそうではない。主キリストの、親切、慈愛、広い心、真実な飾らない態度、すべてを見渡し、小さな善を認めて助けようと用意してられる態度、これこそ、我々が神に求めているものである。

2月25日《上を仰ぐ心からなる愛の一瞥を神は喜び給う》

2月26日《人間の性質の最良のものは誠実》

誠実と感謝、この二つが大切。今の人間には希薄になっている。

3月1日《試練の意味》

エゴイズム（自己中心）は真の信仰生活の敵。財産、名誉、良い評判、健康、働く力、家族、生活の喜び、これらすべての宝（生命さえも）を直接に、当然のごとく「己がもの」として所有するのではなく、心の中だけででも（自覚として、心根として）一たびはすべて神にお返しして（自分は無一物の心根）、あらためて神から感謝をもってお受けするとの自覚が必要。試練は、その自覚を与えるためのもの。

（奥田注）ヒルティのこの主張（考え方）は、ヒルティの最も根本的な考え方（思想）を表している。6月1日においても、同様の主張が展開されている。

「人はたえず、自分の所有する一切のものを捧げ、とくにこれだけはほんとうに自分のものといえる自己の意志をも、完全に神にゆだねる覚悟をしなければならぬ。そうすると突然、新しい段階が開けてくる。この段階に立つと、自分の過去の歩みがつきり分り、特に、自分が幸福な道を選んだこと、そして今や一つの新しい自由が、しかも永遠に、増し与えられたことが明白になる。」

3月3日《地上の最もいきいきとした幸福》

人生のどんな境遇においても、神の導きと助けとを固く信じることができ、ヨハネ福音書15・7をしばしば実際に経験したなら、憂いや恐れは消失し、人生の



あらゆる困難は信仰を深めるための単なる修練となる。しかも勝利をもって飾られる。

「汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、さらば成らん。」（ヨハネ15・7）

3月4日《健康万能思想の誤り》

健康に恵まれているなら、神に感謝。健康でなくても思い煩うことはいらぬ。最も偉大な仕事をなしとげたのは、むしろ病弱者だった。

3月7日《有益な仕事の継続は、絶えず神の近くにあることと並ぶ幸福の条件》

過度な仕事や、せっかちな仕事ぶりは不要。

3月9日《真理と永遠の生命への道は、狭い細い道》

唯物論と迷信という二つの死の淵の間をぬける、きわめて狭い小道を歩むべきこと。それには神への信頼と神の導きが必要。

3月10日《この世の不正と神の正義》

この世ですべての勘定が清算されるのではなく、来世においてなされるはず。正義が償いを求めるのは理性の要請。この世で不正が罰せられずに行われている事実は、来世が実在することを推論させる。

3月11日《健康な生活には喜びが必要》

永続的な、つねに得られる喜びを、後悔しないですむ喜びを求めること。

3月12日《つねに神のみことろだけを行うこと》

3月13日《生活上に生起する試練や心労は、修練のために神から授けられた機会である》（奥田注）これもまた、ヒルティの思想（信仰）の核をなすもの。

3月15日《勝利の人生の秘訣》

主なる神・キリストは、あなたに恵みを施す日を待つておられる。神を信じて、神の道を誠実に進もうと努めるならば、万事はひとりで、うまく運ぶのだ。これで人生は非常に楽になる。起るかもしれない不確かな事柄に対する心配は人を消耗させる。神に全托することが勝利の人生の秘訣。

「あなたの憂いをすべて主にゆだねよ、主はあなたに代り配慮される。」

主の御手から苦しみも喜びも安んじて受け、ひるんではならない。主はあなたの運命をすぐにも変えられる。

いたずらにあなたを苦しめるために苦難が与えられたのではない。

信じなさい、まことの生命は悲しみの日に植えられることを。

3月16日《信仰は、それ自体すでに一つの幸福》

3月19日《朝、目覚めて直ぐに感謝を》

3月23日《いかなる我意も享樂も念頭にないことは、すばらしい境地》



そうならば、毎日のように、なにか新しい善いことが生じる。求めもしないのに、すべての人がこちらの願い通りのことをしてくれる。長い間の欠点までも消え去ってしまふ。

3月27日《内的進歩の最良の徴候》

それは、きわめて善良な、心の気高い人びとのなかにと心地よく感じ、凡俗な人たちのなかでは常に不快を覚えることである。来世の生活においても同じ。

3月30日《神とキリストにのみ仕えるべきこと》

地上で仕えるべき最も偉大な主人は、物質的進歩と享樂とであろうか、科学であろうか、芸術であろうか、祖国とその代表者であろうか、人道（ヒューマニテイ）であろうか、教会であろうか、それとも神とキリストであろうか。

あなたみずから決定し、正しく、また心をつくし精神をつくして、それに仕えるべきこと。

要約と解説

ヒルティ『眠られぬ夜のために 第一部』(岩波文庫) 4月～6月

奥田昌道 選

4月1日《偉大な思想の成長の土壌》

偉大な思想は、ただ大きな苦しみによって深く耕された心の土壌のなかからのみ成長する。そのような苦痛を知らない心には、ある浅薄さと凡庸さが残る。いくら竹馬に乗って背のびをしたとて無駄である——例えばその竹馬が宗教的な科学的な、それとも哲学的な性質のものであろうとも、あるいは人間的な特性であらうとも。しかし、ひとは余儀なくされるのでなければ、だれがこの実り豊かだが同時に恐ろしい道にみずから進んでふみ入る勇氣を持つだろうか。また、神の導きの手がなければ、だれが、時には毛筋ほどにも狭い、深淵のふちの小道を通りぬけることができるか。

4月6日《真実なものを見わせるある種の本能の必要性》

今日の人間社会の状態において、おそらく最も必要と思われるものは、真実なものを見わせるある種の本能である。つまり、それは、無数の企画や組織や団体や党派の扇動や、文学的および政治的潮流や、または宗教的団体や宗派などのかにまき込まれないために必要なのである。これらの動きは、毎日のように、すべての教養人に襲いかかってくるが、真に生命のあるものは、そのなかのほんの一部にすぎない。……こういうものから、できるだけ離れているがよい。

あなたがなんらかの形の無益な人道的事業にたずさわってあなたの生涯をむだにしたくなければ、真のキリスト教を促進し、これに反対するさまざまな偏見を克服することに力をかすがよい。「まず人間を改造せよ、そうすれば人間の環境はおのずから変化する。」

4月9日《有害なことが思いがけなく身に迫ってきたときの対処法》

なにかあなたにとって有害なことが、思いがけなく身に迫ってきたならば、これを防ぐために、まず常識の原則にしたがって直接できるだけのことをするがよい。つぎには、しかし精神的に——あるいは、それで心が落着くというのなら、肉体的にも、われらの主のみまえに身を投げて、ヨハネによる福音書15の7か。16の24を唱えながら、まず正しい洞察が与えられるように祈り、次にはあなたのためにいづれが本当に必要であるかに応じて、忍耐力か、神の助力かを祈り求めるがよい。



それがすんだら、ふたたび安らかな気持ちで日々の仕事にかえり、いたずらに無益な心労にかまけないがよい。

「なんじらもし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、さらば成らん。」(ヨハネ15・7)

「なんじら今までは何を我が名によりて求めたることなし。求めよ、然らば受けん、而して汝らの喜びみたさるべし。」(ヨハネ16・24)

4月10日《善に対する怠慢は大きな欠点。『献金』についての心得》

善に対する怠慢は、きわめて大きな欠点である、おそらくあらゆる欠点のなかで最も大きいものかもしれない。というのは、そこになんらよい面が見あたらないからである。それにもかかわらず、自分についても他人についても、この欠点をあまり重く見ようとしない者が多い。というのも、この欠点は全く消極的なものであつて、普通ひとに気づかれにくいからである。

一般にわれわれはむしろ善い行いをする機会を避けようとするが、本当に聡明な人であれば、できるだけその機会を願い求めるであろう。それゆえに、われわれは天国をば、際限なく善を行う機会と、それをなす限りない力と意欲が与えられる場所だと考える。これと違つた天国は、いやしくものを考える人間にとつてふさわしいものとは思われない。われわれが時どき感じる安息欲は、全生涯を、いわんや永遠の生活を満たすことはできない。それはただつかのまの感情にすぎない。

これとは反対に、目の前になすべき善の機会がなく、またそれをする意欲も力もないということは、すでにこの世ながらの地獄である。ところが、多くの人びとは、さらにすぐれた人生をおくることができずに、いたずらになすこともなく過ごしている。ハガイ書1・6～8、2・4～9。

つねに金銭に関して心やすらかな生活を送りたいと願うならば、たとえどんなに少額でも、その収入の一定の歩合を善行の目的のために使うことから始めねばならない。これはだれにもできることであつて、そのためにそれだけ貧しくなるなどと思うなら、とんでもない思いちがいである。実際は、むしろその反対である。ところが、また他方では、それだけの手数をさえ嫌うほどの怠惰な金持がたくさ んいる。彼らはそのあり余る金の一部を、よく選択もせず、ときには大して善意すらなく、なにかの団体や施設に寄附すれば、それでもう大きな善行をしたつもりでいるのだ。これは全くのごまかしであつて、まさにコリント人への第一の手紙13の3でいわれている使徒パウロの有名な言葉が該当するものである。もつとも今日では、とくに古代や中世の有名な実例にしばしば見られたように、その全財産を貧しい人たちに施すようにとは、だれにもすすめるわけにはいかない。む

しろ、財産を保存し、よく管理して、その収入を神のみこころに従って使用すべきである。もし自分でそういうことが不得手ならば、信頼できる人をさがして、代行してもらえばよい。すべての金持が多少ともこのような仕方で生きようとするれば、世の中はこれまでよりはるかによくなるであろうし、その人自身も、現在よりも幸福になるであろう。

4月19日《十字架による「救済」の秘義》

キリスト教的世界の観の本当の、確固とした基礎は、この世の悪と各個人の内在する悪とは「法理上」(de jure)すでに征服されており、したがって大切なことは、この勝利を「事実上」(de facto)それぞれの場合に有効ならしめ、かつおし進めてゆくことである。これがすなわち、キリストを通じてただ一度だけ行われた、いわゆる「救済」の秘義であって、これを信奉するすべての人にとって、疑うことも、否定することもできない真理である。

4月26日《神のみこころを完全に行うための心得》

神のみこころを完全に、しかもそのみを行おうと一たん決心したならば、まず、たえまなく働き、人間にゆるされたすべての手段をそのために忠実に用い、そしていたずらに心配をしてはならない。なぜなら、上から与えられる真の知恵は、それを実際に用いないうちは、つまり、なにもせずに保存するためには、決して授けられないからである。また一般にわれわれは、それ以前には、その知恵を正しく理解しうるような心の準備が全くできていないからでもある。けれども、この知恵は、われわれがまじめにそれを求め、また把えようと用意しているならば、全く確実に、時をあやまたず、与えられるものである。われわれはつねに注意深くありさえすればよい。つかのまの享樂に惰眠をむさぼったり、休養ばかりを望んだり、といつてやたらにあせつたりしてもいけない。なぜなら、神の道を進むには、つねに元気で澁刺として働かなければならないが、あくせく働く必要はないからである。次に、われわれは、正しいことを行うために、あらゆる機会を注意ぶかく見のがさず、また不慮の出来事に会って驚いたり、落着きを失ったりしないように心がけねばならない。そしてなによりも、口数を控えねばならない。とかくよいいな口をきくことが、厄介な状況にまき込まれるものとなるものだ。しかし同時に、将来の仕事をメモにとり、仮りに書きとめて早めに準備をするのも、たいへん結構である。しかし本当にそれを確定するのは、その下書きを用いる間ぎわに行わるべきである。

どんな仕事でもすべて、長い間かかってまわりくどい「下準備」などはせず、即座に、元氣よくとりかからねばならない。ただちに目標とする中心的な思想に向って突進すべきである。その場合、たいてい、重要な思想は、きわめて数少な

いものである。そうすれば、付随的な思想は、仕事をすすめる間に、おのずからそれにつけ加わって思い浮ぶものである。

5月1日《神の賜う試練のかまど》

5月2日《神が喜ばれるのは、ひたすらな憧れと、さしのべる手だけ》

5月5日《人の「計画」と神の「導き」の違い》

5月6日《自分の内的進歩について》

5月7日《人間の内的進歩と「神のしもべ」》

5月9日《嫉妬について》

5月10日《神のそば近くにある喜びは強烈だが、静かで平和に満ちた感情》

5月14日《神に対しては、限らない誠実と真実のみが大切》

5月15日《最も有害なものは虚栄心》

5月16日《最も気持のよい、有効なものは、落着いた、変わらぬ友愛》

5月23日《愛こそが最高の知恵》

5月29日《祈りと思索の双方が必要》

5月31日《喜びよりも苦しみを愛するように》

6月1日《神の導きの不思議さ、一切を、特に自己の意志を捧げきること》

6月2日《超感覚的な諸力の存在について》

6月3日《神の積極的接近は、たぐいない奇跡》

6月4日《神の霊が心の戸を叩くとき、開けないのは意志的拒絶であり、その責任は重大》

6月6日《誤った宗教教育、キリストの言葉はことごとく霊であり、生命である》

6月13日《神への愛だけが人をエゴイズムから解放する》

6月15日《勇気の大切さ》

6月19日《共同生活での気持ちのよい性質は、他人の願いにすぐ応じる、親切な好意と気軽さである》

6月22日《感激性と健全で冷静な良識の結合こそ大切》

6月28日《キリスト道の独自の点は、狂信を伴わぬ明瞭で冷静な良識と、超感覚的なものを受容する繊細な心、これら二つのものの結合にある》

要約と解説

ヒルティ『眠られぬ夜のために（第一部）』7月～10月

（岩波文庫）奥田昌道 選

7月～10月 気高い、幸福な人生への道

7月5日《神の霊の存在の確証》

神の霊の存在については、たとえ他に実証的な証拠がなくても、次の事実はやはりその証拠といえるであろう。すなわち、われわれ自身が精神と意志をつくして努力しても、もし神がそれを拒まれるならば、われわれは神との結びつきを回復することができないし、また「熱心な信心」によっても、心配や悲しみをのがれることができないのである。これに反して、神の霊がしばしば思いがけない仕方であつてきて、その生命いのちと喜びとをもつてわれわれの全存在を満たし、一瞬のうちによつての重荷をわれわれの心から取り去ることがありうるということである。それでも、人間から全く独立して自主的にはたらくこのような力が存在しないであろうか。或いはなんらの実在でもないであろうか。一体、力より以上に実在するものが他にあるだろうか。とにかく、人間のたんなる思想は決して力ではない。これは、自分で慰めを得ようとして得られなかつた経験をたびたびくり返した人ならば、だれでも知っていることである。

7月10日《悲しみの時に》

神のそば近くにあることこそ、本当に人間の幸福の真髄であるが、もしそれを欲するならば、いくらかの悲しみを願わねばならない。というのは、人生の経験を積んだ人なら誰でも知っているように、他のいかなる時よりも、また、どんな方法でよりも、深い悲しみの時に、われわれは神に一層近づくからである。

7月12日《人生の目標》

われわれは人生を立派なものにすることができるといふのは、およそ人間の想像力が描きうる最もすばらしいものは、全く自由な、しんから気高い性質の間だからである。そこまで到達することが、明らかに人生の目標である。その他のすべては、ただそのみすばらしい代用物にすぎない。そしてこの目標に本当に到達したいと念願する人にとっては、どんな運命も必ずその目的に役立つものである。

しかし、そうするためにはつきり知っていなければならないのは、たんなる動物的な仕合せなどは少しも価値がないばかりか、一つのごまかしにすぎないこと、



これに反して、神に仕えるのがすべてだということである。

7月14日《最も確かな道》

マタイによる福音書6の33・34

「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて添えて与えられるであろう。だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦労は、その日一日だけで十分である。」

われわれは神の命じ給う道を歩いていれば、日々その務めと力とおのずから与えられる。とくにそれを得ようと思ひ煩うことはいらぬ。ただそれを受け入れて、実行すればよい。

これは、世間の流儀による生活にくらべて、どんなに戦いや苦しさに伴うものであつても、なお平安な生活である。また、ルカによる福音書22の35において、キリストが弟子たち（彼らも私たちにおとらず心配性であつた）に向つて発せられた大胆な問いは、今日もなお、真心をもつてキリストに従うすべての人にあてはまる問いである。

あらゆる道のなかで、これこそ最も確かな道である。私自身も、ごくさやかな程度ではあるがそれを経験して来たので、その確かなことをあかしすることができる。

7月15日《信仰とは、神に己をゆだねること》

信仰とは、神へ向つてひたすら努力することではなく、神に己をゆだねることである。つまり、われわれが神の門をたたくのではなく、むしろ神がわれわれの門をたたかれるので、われわれは神にそれを開かねばならないのである。

そうすれば、万事が順を追うてまったくひとりで行われる。

「神を愛する者たちには、すべてのことが益となるにちがいない」（ローマ8・28）。

このことを信じる人にとっては、普通の意味での「幸福」や「不幸」の観念は、もはや存在しない。

7月16日

他の人びとが欲するままに任せておいてよいことが、世には限りなく多い。

結局、それはどうでもよいことだからだ。そうすれば、自他ともに生活が非常に楽になる。

7月24日《事の成否は神に》

われわれは何をなすべきか、またそれをいかになすかについて、決して無頓着であつてはならない。いや、むしろわれわれはすべての勤勉と才能とを真剣に活

用しなければならない。ただし、野心や所有欲からではなくて、義務感と神への愛からそれを行わなければならない。そして、事の成否は、神に委ねるべきである。そうすれば、何も吹聴などしなくても、万事がうまくはかどる。それでもなお犯す外的失敗でさえ、われわれに有益なものに変わる。もしこのことが信じられないなら、自分でためてみるがよい。

7月25日

生の享樂を根本的に断念することは、初めのうち実に困難なものである。鈍感におちいらないでこれを堪えぬくには、享樂を断念して空虚になった心に、神への愛を迎え入れ、福音書のいわゆる聖霊についてみずから体験するほかはない。そうでない場合には、ひどい逆転が起りがちである。マタイによる福音書12・43～45

7月28日

われわれは、本当にできるだけのことを、人びとのためにしなければならない。とにかく、いつでも、そしてだれに対しても一様に、親切で好意的でなくてはならない。だが、決して自分自身のために彼らを求めたり、彼らに多くを要求したり、あるいは期待すべきではない。

真のキリスト道、信仰の成長

8月1日『神のみ思い…すべてをわれわれのために欲したまう』

かなり多くの本当に敬虔な人たちが、祈りや教会通いや、すべてのいわゆる「礼拝行事」を、一種の義務や善行として、いわば、神によるこぼれる仕事、また彼らの人生の任務の一部を果す仕事だと考えている。しかし、それらの行為は、われわれの魂の力を高めるための手段であるべきで、ただこの目的をみたすかぎりにおいてのみ、その価値を持つのである。もし教会に入る時よりも、より善き人となつて出てくるのでないならば、また、食卓の祈りのあとで飲食の快樂に溺れてしまうならば、これらの宗教的な行為の意味がはつきり分るまで、それを中止する方がましであろう。神はみずからのためになにごとも求めず、すべてをわれわれのために欲したまう。ところが、われわれの宗教教師は、神を絶えず要求する父として説き、そのような神をできる限りなだめよと教える。これは、真に敬虔な人たちにとつても、しばしば実にわずらわしく思われる。絶えず神とともに生きる幸福についてみずから経験を重ね、真に確信ある觀念を抱いている者は、全体としてほんの僅かである。教義を通じて、このような觀念を与えることは到底できない。

この点に、すべての宗教教育の根本的な誤りがある。宗教教育というものは、つねにただ入門的なものにすぎず、まだ信仰の大部分をまつたくのみこめない子

供の心に嫌悪を起させなければ、最上である。少なくとも私は、かつて宗教教育によって信仰へ促された経験よりも、信仰から突きはなされ、妨げられたことの方がはるかに多かった。

8月2日《単純な信仰の境地：神への真の愛のみ》

人の生涯には、いつか突然、単純な信仰の境地が訪れて、神への真の愛がなければ、どんな信仰も、また神の意志についてのどんな歴史的な、あるいは教義的な知識も、魂の向上に役立たないことがわかり、反対に、心のなかに神への愛があれば、一切が明らかになり、やさしく、簡単になる、ということが示される。われわれはこのような境地に達しなければならない。そうならば、われわれはすべての哲学書や神学書を閉じてよろしいし、またそうしなくなる。

神学は、超感覚的な事柄についての人間的な学問である。このような学問が存在しうるかぎりそれはよいもので、大いに尊重すべきである。けれどもまた、超感覚的なものについては、神のみが授けることができる直接的確信が存する。ただ、この場合、自己欺瞞に陥らないために、十分な良識か真の教養が、そしてそのどちらについても誠実な謙遜が必要である。

マタイによる福音書11・29、12・18～36、ローマ書8・14、コリント第一12・3～11、ヨハネ第一4・20～27

8月17日《われわれの内に働く神の力の秘密》

たえまない神との交わり（単に時どきではない）、すべての享樂とあらゆる種類のエゴイズムの完全な断念、これこそがあの当時と同じように現代においても、われわれ人間の内にはたらく神の力の秘密である。このことを彼ら——聖職者たち——は、まさになさねばならない。それができなければ、彼らのあらゆる活動は無益である。「この世の君」（サタン）はなおも彼らをあざ笑うであろう。そして、それが当然である。

8月20日《説教者の心構え》

職業として説教することがとくに困難なわけは、個々の人間の魂の内部ではたらく神のみ業が段階的なものであつて、聴衆の信仰の段階が説教者のそれと必ずしも一致しない、いや、それどころか、めつたに一致することがないからである。たとえそうであっても、説教者はそんなことには頓着なく、自分が持つている一番よいものを与えるのが最上の方法である。なぜなら、彼の考えが誠実であり、彼の仕事がおよそ神の計らいによるもので、自分の虚栄心から出たものでなく、したがつてごまかしの仕事でなければ、それぞれの段階が少なくとも他の段階のいくらかを含んでいるので、相手に理解してもらいうことが出来るからである。信仰をもった説教者でありながら聞き手に理解されない人は、福音という上等のぶ

どう酒がきたない樽を通して流れているわけで、実はまだ説教などする資格が全くない人にほかならない。

8月25日《聖霊は真理の御霊…われわれをすべての真理に導きたまう》

われわれは、すべての宗教的真理を一挙に理解することはできない。反対に、それを受け入れる力が高まるにつれて、ただ次第しだいに授けられるものである。その力はいいてい体験や人間や書物を通じて与えられるが、ときにはもつと直接な仕方でもなされることもある。キリストも、むしろいい場合には、「この言葉を受けられる者は受け入れるがよい」（マタイによる福音書19・12）と言いつておられる。そして最後の説教において、なお語るべき多くのことを言わないでおいだということを、明らかにしている。ヨハネによる福音書16・12～13。それを補い、かつ継続して行くために、われわれが「聖なる」と呼ぶ霊が存在する。しかし、この霊をあなた自身の霊ととりちがえたり、おまけに両方を混ぜこぜにしたりしないように用心しなさい。むしろ、どんなあなたの気分や傾向や学識によっても、またあなた自身の本性によっても妨げられることなく、純粹にあなたの心のなかで真理を語ってくれるもの——そのような何かがあなたの心に入つて来なければならぬ。その語られる真理は、つねに、キリストが語ったことに基づいて述べられねばならない。そこから遠ざけようとするものは、いつわりの霊の言葉であり、その業である。

人間は生涯中にいくたびとなく、この世における自分の使命に迷いを生じたり、気落ちしたり、あと戻りしたくなる時期が訪れるものだ。そのような時に、最も確かな慰めは、もともとわれわれが神を選んだのでなく、神がわれわれを選んでその所有とされたという思いである。ヨハネによる福音書15・16、エレミヤ書10・23。

こういう思いをもって、「屈辱の谷」を通り抜けねばならない。このような苦難の目的が達せられたならば、ただちに事情は全くひとりでよくなってくる。

8月29日

力づよい善人にならなくてはならない。すなわち神の前には謙遜に、人間に対しては確固たる態度をたもち、また、たいいてい無遠慮きわまる世間に対してはあまり柔軟すぎないことである。だが、そういうことは、世間に大して価値をおかぬ時にのみ、できることである。

8月30日《成長には時間がかかる》

神の国において先ず学ばねばならないことは、すべての善は信仰によつてわれわれのうちに生じることである。そうでなければ、善は成長する力を持たない。次に学ぶべきことは、すべてのものは成長するのに時間があるということ

である。あまり進み方が早すぎたものは二ども三度もやり返さねばならず、結局、一番長くかかることになる。

「神のなされることは皆その時にかなって美しい」(伝道の書3・11)

ただ人間だけがいつもせかせかと急ぐ。

多くの人たちには、世間に対して守勢以外の態度をとることはむずかしい。彼らをつき動かす原動力を欠いているからだ。もしあなたもそうであるならば、いつも聖霊のはたらきに心を開いていさえすればよい。それで十分である。ヨハネによる福音書14・26、16・13、ヨハネ第一書2・27。

8月31日《不安と苦難の役割》

永遠の真理の新しい、実りゆたかな種子がわれわれの心に落ちて、そこに根をおろすことができるには、その前に不安という鋭い、深く切り込む犁の刃が、われわれの心のあとからあとから生じる硬い殻を、いくども切り開かねばならない。このような過程を経ているないと、実際に人生の根底にある本当に真実なものに対していつまでも無感覚でいるであろう。

われわれは多くの人生経験をつむことによって、全く苦難のない生活をもはや願わないという心境に達する。これが「永遠の平安の状態」である。この地上では、苦難こそがわれわれの悪い性質からわれわれを守ってくれる、われわれの変りない番人であり、そのうえ、苦難がなければさらに堪えがたいであろう生活の単調さをも破つてこれを活気づけてくれるものである。

9月17日《本当のキリスト教とは》

もしわれわれのキリスト教が、われわれを日々の生活や職業上の任務に前よりも忠実にし、金銭上の問題に利己的でなく、富と名誉に対して一層無関心にし、すべての人に対してより親切に、心により大きな喜びと未来に対する希望とを抱かせるというのでないならば、それはまだ本当のキリスト教とはいえない。それはキリストのキリスト教というよりも、むしろ宗派あるいは教会にかかわる事柄にすぎない。すでにキリスト教という言葉からして、人を誤らせやすい。もしその言葉を、キリストの生き方や考え方にひたすら従うということ以外の意味に解するならば、それは誤った考えである。また、キリスト教とはいったい何かということを、方々たずねまわる人があったとすれば、その人は真のキリスト教を求めているのだといつても、おそらく間違いはあるまい。

現代では、いかなながら、教養人の大多数が、およそキリスト教を信じようか、それともなにか他の考え方や哲学を選ぶべきかに迷い、また、キリスト教を(たいいてい外的理由から)信じようと決心したあとも、そのどの「傾向」や「解釈」を選ぶべきかという問題を、あまりにくどく、あまりに長くいじくり回している。

そのために、キリスト教とはいったい何か、キリスト教はそれを信じようとする者に何を要求するかについて、現代のさまざまな見解や学説の雑音にとらわれずに、真剣に反省するだけの十分な時間がなくなってしまう。

現代の信教の自由は、われわれの救いと生命にいたる道をかえって困難にした。しかし一方、この道を一層信頼すべき、一層確実に正しい目標へと導くものとしたことも確かである——およそこの道を本当に歩くならば。

9月23日《キリストの弟子たる者の心得》

かのパリサイ人や律法学者たちがキリストを非難して言ったことを、いやしくもキリストの誠実な弟子たる者はだれもみな経験しなければならぬ。さもなければ、まだキリストの弟子とはいえない。

実生活においてしばしば、人びとがわれわれに敵対して、あるいは味方して行動するのは、彼らが自由にそうするわけではなく、彼らを通じてわれわれに働きかけようとされる神の道具にすぎないことに気づいて、慰められる場合がある。だから、やれ敵だ、味方だと決めてかかるのは、たいてい、あまり大仰にとりすぎることになる。

最初の青年期を終えたばかりの、自然のままの人間の心にはすべて、経験の結果として、人間一般に対する根深い怒りの核がひそんでいる。これは神の恵みを通じて残らず摘出されねばならない。その後初めて、われわれはキリスト者となるのである。ルカによる福音書6・22～38。

9月25日《キリスト教の真理性の証明》

キリスト教はすべての気高い性質をもっている人間の、真理と心のまつたき平安とに対する渴望をいやすことができるという、この経験上の証明にまさる、その真理の証明は他にない。このような渴望をいやす者こそは、悩める人類を助ける権能をもった真の救済者である。

およそキリスト教は非実践的な理想主義ではない。むしろ反対に、この世の唯一の実行できる、また実際に最も効果ある理想主義である。このことが、この世におけるキリスト教の永続的な意義である。

9月27日

人間との交わり、いや、さらにひろげて、神のあらゆる被造物との交わりにおける唯一つの正しい原則は、なにものをも不必要に苦しめず、すべてのものに同情を寄せ、すべての人に平安と生きるよろこびを与えること、しかも、誰もが自分の務めを果し、単に享樂のために生きるな、と要求することである。

9月28日《気高い、感じやすい性質の人に対する対し方》

全く気高い、そして同時に一般にいくらか感じやすい性質の人びとに対しては、



彼らの宗教的または哲学的信念の、あるいはその道徳的生活のなんらかの欠点を、決してじかに非難してはならない。それが正当であるかどうかにかかわりなく、彼らはそれをあまりに強く感じるからである。

むしろ彼らが多少とも危険なわき道にそれていることを、それとなく気づかせるようにつとめねばならない。それには、しばしば長い間沈黙をまもっているのが、一番よいことさえある。

そうすれば、他人から言われるよりも、彼らみずから、はるかによく、正しく、しかも手痛く自分に真実をいい聞かせるであろう。なおその上、きびしい試煉のときに周りの人たちが信頼にみちた忍耐と理解と思いやりとをもって彼らを取扱ってくれたことを感謝する。これに反して、人が彼らに対する信頼や尊敬をなくしてしまったと思うと、彼ら自らともするとそれらをすてかねない。そのために、口では言えないほどのひどい損失が生じる。多くの両親や教育者たちはこのことを十分に理解していない。そしてあとになって、一人の気高い生命の廃墟の前に暗然と立つことになるのである。そのように壊れたものは、建て直しができないことが多いし、もしできるとしても、前に必要であつたよりもはるかに多くの忍耐と思いやりとをもつてしなければならぬ。

9月30日《苦難のあとの幸福、恩寵の確信、内なる神のみわざ》

大きな仕事の重荷をかかえた週日のあとで迎える日曜日がこのほかに楽しいように、苦難のあとの幸福は最もさわやかで、危険も一番すくない。

自己愛から根本的に放たれ、それが心にきざすたびごとに、すぐさま生身なまみの悪魔のように憎むようになれば、すでに神の恩寵にあずかっていると確信してよい。なぜなら、そういうことはわれわれの内部における神のみわざであり、神の生ける臨在がなくては、決して起りえないからである。

キリスト者の生き方

10月2日《何を本当に成し遂げたいかを知ること、目標実現の道》

人生において、なによりもまず知らなければならないのは、自分が何を本当になしとげたいかである。そしてついにそれを知りえたなら（そのために人は通常、生涯の半ば以上をついやす）、この目標とともに手段をも得ようとしなければならぬ。

だから、たとえば、神に身を委ね、そして、神に喜ばれる人（これが、クリスチヤンという言葉を一一般にわかりやすく言いかえたものである）になりたいと思うなら、苦難をも望まねばならない。そして、人間の自然のままの心が求める、絶えまない安逸な享樂を願ってはならない。こういう種類の苦難は決してやたらにたくさん来るものではなく、また、神との間が真にゆるぎないものとなれば、心配も絶

望もつねになくなるので、多くのことに堪えることができる。

自分の才能を高め、老年にいたるまで保つていたいと願うなら、多くの善事をなさねばならない。これが最も確かな方法である。

正しい活動をするには、より完全な人になるよりほかなく、より完全な人になるには、善事に習熟するよりほかはない。単なる知識や思索だけでは、ためである。

10月5日《神への唯一つの捧げもの》

人間が神にささげることのできる唯一の贈り物は人間の意志であり、神が価値をおかれるのもこの贈り物だけである（その他のものはのこらず神の賜物である）、そして、人間がこの意志をすっかり神にささげるならば、その時、神は、こういうと不遜に聞えるかもしれないが、神の心を人間のものとされ、その後は人間のすべての願いをかなえてくださる（もとも、この祈願そのものも神によって導かれるが）。こうなれば、人間はただ祈願し、そして受けとればよいことになる。また、神みずからが、詩篇81篇10節の「あなたの口を広くあけよ、わたしはそれを満たそう」という言葉をもつて、人間にそれを促していられる。

なぜなら、われわれが神について多少とも知るかぎりでは、神はかぎりなく愛にみちたお方であつて、神の願いは、自分が人間にとって大切なもの、いや、一切であることであり、人間の弱い本性をそこなわないかぎり、できるだけ多くのものをすでにこの地上において人間に与えることである。しかし、残念ながら、人間の弱い本性は、一度にはかなりわずかな幸福にしか堪えられないのである。

10月9日《キリスト教の全体は、ヨハネ福音書第三章に含まれている》

キリスト教の全体を簡単な言葉にまとめて理解したいと思うならば、それはヨハネによる福音書第三章にふくまれている。ところが、この教えについては、ほとんど二千年前と同じ誤解が、キリスト教世界のまん中にいるわれわれの間に、いまもなお存在している。

今日でもやはり、どんな教会の正統的教義も、学問も、博愛事業も、それが人間の本性を変えないかぎり、われわれが真の生命にいたるのを十分に助けうるものではない。言葉をかえると、キリスト教の要求が、人間にとって自然になり、すべての自然なものと同じく、親しみやすく、じめいなものとならねばならない。そうになると、人はもはやキリスト教の要求について思案することも、なにかを決意することも全くいらなくなり、逆に、キリスト教に反することには自然に嫌悪をもよおし、それを我慢するのは骨が折れるようになろう。そこまで行くと、ヨハネが、明らかに自分の経験から、その第一の手紙のなかで主張していることが、つまり、神の命じ給うことはすこしも困難でないという、普通には信じられないことが、真実となってくる。なぜなら、すべて自然になつてしまったものは別段

困難ではないからである。

以上のことをよく考えてみなさい。あなたもそこまで到達しなければならないし、また実際に達するでしょう。それが人生の目的である。そこに達するまでは、私とともに、安んじて、自分をただキリスト教の友であり、生徒であると考えなさい。そうすると、われわれはともかくも大へん善い道連れになれるだろう。というのは、私は自分の生涯で、完全に自然なキリスト者にあまり多く出会っていないからである。しかしそのようなキリスト者たち(全く真実に敬意を表すれば)は、カトリックとプロテスタントの両派にほぼ等分されており、また男性よりも女性のなかに多い。

10月11日

実際の苦悩と苦痛に対しては、いつでも神の助けを得ることができる。しかし、ただ自分で想像しただけの、あるいは大げさに考えられた苦しみに対しては、助けがえられない。自分でできるだけのことは耐えなければならぬ。

どんな大きな成功にも、神は必ず一滴の苦味を添えずにはおかぬ、それがあなたを損うことのないために。

10月15日『祈りのときの心構え』

祈ろうとする時は、まずわたしたちが持つているものに対する感謝をもって始めねばならない。そうすると心が祈りにふさわしい気分に通ずる。つぎに自分の意志を神にゆだね、最後にその日一日のために信仰と愛とお願ひする。それから初めて、目前の必要事を祈らなければならぬ。己の意志を神に委ねた時のみ、われわれの祈願に神がみ心をよせてくださることを、十分の確信をもって期待することが許される。そうでなければ、やはり自力にたよるばかりではない。しかし、自分の意志を神にゆだねて、神の誤りなき導きに固く信頼しながら、自分で勝手に未来を予見しようとせず、一步一步未来の闇のなかを進んでゆくならば、およそこの世で可能な、人生の確固とした、静かな幸福が始まるのである。

10月16日『誠実の大切さ』

誠実は本来、とりわけ美しい大切な性質である。それは実に動物をすら気高いものにし、彼らをほとんど人間なみの価値と品位にまで高めるほどである。誠実が全く欠けている場合は、どんなにすぐれた才智と高い教養のある人間でも、社会にとって危険な野獣にすぎない。

10月17日

たしかに、この世には多くの悲惨がある。しかし正しいところに助けを求めるなら、それに対する力強い助けも少なくない。そして拒みさえしなければ、悲惨からの完き救いも最後には与えられる。

10月18日《神において見出す真の愛と喜び》

ジェノヴァの聖女カタリナの言葉、

「人の精神は愛したいと思い、愛において祝福にあずかりたいと願う。造物主も人間をそのように定められた。人がこの愛の衝動をうつろいゆくものによつて満たしうらと思うならば、それはおのれを欺くものである。そして、至高善である神を求めようとしないうで、自分に与えられた貴い時間を、そのような愚かさで、いたずらに失っている。そうではなく、人は神においてこそまことの愛と聖きよろこびを見出し、まつたき満足が与えられるであらうのに。」

実際その通りである。しかし、そのことをほんとうに信じるのはなかなかむずかしい。そのためには、大きな苦難の時期が必要であり、それに堪えたのちに初めて、ヨブとともに次のように言うことができる、

「主よ、わたしはあなたの事を耳で聞いていましたが、今はわたしの目であなたを拝見しました」(ヨブ42・5)。

10月22日《聖霊、聖霊を宿した人、救いの確かさ、完全なキリスト教》

ヨハネによる福音書4・24、6・65、9・39、14・6について。

われわれは、この世の生活では、神が何であるかを知ることができない、同様に、キリストや聖霊が何であるかも知ることはできない。これについて教理問答書や教理教本に書いてあるすべてのことは、要するに、……人間の観念の所産にすぎない。……。もしわれわれが神の確かな存在について、キリストへの信仰の力について、また、われわれの霊とは異った霊の光の本性について、われわれ自身の経験をもつていなければ、そのような人間的な教条についての死んだ教会的信仰以外のものを持つことはできないだろう。実際、いつの時代にも、多くの人びとの信仰はそのようなものであつたし、今もそうである。

ヨハネによる福音書

「神は霊であるから礼拝するものは、霊とまことをもつて礼拝すべきである」

(ヨハネ4・24)

「それだから父が与えて下さった者でなければわたしに来ることはできないと言ったのである」(ヨハネ6・65)

「わたしがこの世に来たのはさばくためである。すなわち見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである」(ヨハネ9・39)

「わたしは道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないで、父のみもとに行くことはできない」(ヨハネ14・6)

そのような信仰で満足しなくてはならぬ、キリストの言葉から出発して、キリス

トがこれらの超自然的なものについて考えたとおりの、また、考えてもらいたがった通りの見解に到達しようと努め、それに固く頼らねばならない。

聖霊は、その他の点ではまことにすぐれた多くのキリスト者にとつても、まだなじめないものであり、いくらか怖い、ほとんど不気味なものではあるが、これはつねに見張りをおこたらぬ生きた真理の霊であつて、真実あるがままに人間や事物を見るものである。すべての人間関係にまつわる全くの嘘、あるいは半ばの虚偽から脱け出るために、われわれはこの霊を授からねばならない。

しかし、この霊を宿した人のうちで、それがどんな実を結ぶかについて、あなたみずからがパウロのガラテヤ人への手紙5・22を参照し、それにしたがつて、この霊があなたや他の人内にすでに宿っているかどうかを、容易に判断することができる。そして、たとえばその霊の宿りがまだ十分強くないか、あるいは弱いからであつても、やはりそのために、あなたはすでに「神の子」であり、確かな善い道を歩いているのである。そのことを、使徒は、同じ手紙3・26で、欠点の多いガラテヤ人たちに向つて述べている。それはわれわれにとつても、心が弱まつた時の大きな慰めである。

「しかし御霊の実は、愛、喜び、平和、寛容、慈愛、善意、忠実、柔和、自制であつて、これらを否定する律法はない。」(ガラテヤ5・22)

「あなたがたはみな、キリスト・イエスにある信仰によつて、神の子なのである。」(ガラテヤ3・26)

多くの不幸な人びとは、彼らが「救われ」ているかどうかについて、いろいろと無益な考えにふけるが、こういう考えは、自信過剰の場合と同じように、有害なものである。……

この点について聖書に記されている最も確かな言葉は、すでにたびたび述べたように、ヨハネによる福音書6・37、およびマタイによる福音書11・28にふくまれている。この場合、誠実に求める者には、いかなる例外もない。もしもキリストの言葉(他の人の言葉ではない、使徒や預言者の言葉でさえ無条件ではない)を完全に理解し、それに完全に同意し、自分のうちにそれに対する反抗心をすこしも感じなければ、これが自然の感情にとつて、最も確実な救いの目印である。なおその上に、キリストをそのすべての行いや言葉において、あらゆる他の歴史的現象よりもよく理解することができる、また、すべてのキリストの弟子やそのあとの教父たち、すべての古典作家や古代の偉人たち、中世の神秘家や宗教改革者、あるいは近代の哲学者や神学者などよりも、キリストをよりよく理解しようするような境地へも到ることができる。本来、これのみが完全なキリスト教なのである。

「父がわたしに与えて下さった者は皆、わたしに来るであらう。そしてわたし

に来る者を決して拒みはしない。」(ヨハネ6・37)

「すべて重荷を負うて苦労している者は、わたしのもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。」(マタイ11・28)

10月23日《朝、目覚めた時にはまず感謝を》

朝、目がさめて直ぐ、今日もまた自分が負わねばならぬ十字架のことを思うと、それが自分にはあまりにも重いように思われることがしばしばあろう。また、その日に、さらに将来に、どんなことが一体起きるかを想像すると、すべての感情のうちで最も不愉快な恐怖感に容易におそわれることがある。

しかし、今日もわれわれを目ざめさせてくださった神の恩寵を思い、また神の国のために果すべき奉仕について考えるならば、活動的な人間は、そのために自分になすことができかつ許されている事柄を心に描いて、喜びの感情がわき起り、それが一日中持続するであろう。

10月30日《真の温和と親切》

われわれはみな、生れながら「怒りの子」(エペソ書2・3)である。これは、自然のままの人間にあつては、老年になるといよいよはつきり現われてきて、そのため多くの老人は自分にとつても、他人にとつても荷厄介になる。

決して弱さから出ない真の温和と親切は、より高い生活に達したことの、最も完全な証明である。それは、その人自身の生活が「破滅の荒野」を通つて、「婚姻」(神との親しい交わり)の約束の地に達したときに、はじめてその人に現われうる境地である。

10月31日《恩寵の光線、驚くべき導き》

ルカによる福音書11・36について。

「もしあなたがたのからだ全体が明るくて、暗い部分が少しもなければ、ちょうど、明かりが輝いてあなたを照すときのように、全身が明るくなるであろう。」

われわれに起る最もよいかつ最も決定的な事柄は、つねに電光いなずまのような性質をおびるものである。それは、恩寵の光線であり、別世界から来る光の輝きであつて、たいてい、真理の洞察を与えるばかりでなく、同時に積極的な行為への励ましでもある。その時、すばやく決意して、すぐさま実行するのが、人間のなすべき努めである。そうでないと、恩寵の閃光はすぐ消え去ってしまう。しかし、われわれが決心すると、それはまるで金の翼をもった鷲のように、普通には越えがたい障害をも飛びこえて、猛然とわれわれを高く連れのぼって行く。天国への道は、普通の学修の法則では全く計れない、きわめて独特な道である。それを経験したことのない者は、だれも信じようとはしない。

要約と解説

2012年6月 ヒルティ『眠られぬ夜のために(第一部)』の根本思想(総括)

2012年6月23日(東京新宿)

● Ⅰ 神の実在性、神の霊とその働き、神と人間との関わり方

1月27日、1月28日

神が何であるかは、人間のどんな学問も究明し、定義することはできない。神が実在すること、そして完全と慈愛とが神の本質であるという事実で、地上生活には十分である。ヨハネ伝4・24、出エジプト34・6〜7。

「神は霊なれば、拝する者も霊と真とをもて拝すべきなり」(ヨハネ4・24)

7月5日

神の霊がしばしば思いがけない仕方であつてきて、その生命いのちと喜びとをもつてわれわれの全存在を満たし、一瞬のうちにすべての重荷を心から取り去ることがある。これこそ、神の霊の存在の確証である。

キリスト教の神髄

キリストの言葉そのものを求めるべきこと。

1月1日

あなたが人生の幸福をこころから望むならば、自分でキリスト教をその源において、すなわち、福音書のうちに、とりわけキリストみずからの言葉のなかに、求めなさい。

6月6日

福音書は、ことにキリストの言葉は、ことごとく霊であり、生命いのちである。

10月22日

聖霊、救いの確かさ、完全なキリスト教。

12月2日

最も単純なキリスト教、それはキリストの言葉であつて、それ以外のものではない。

9月17日

本当のキリスト教とは、キリストの生き方や考え方にひたすら従うこと。

10月9日、12月24日

キリスト教の全体は、ヨハネ伝第3章に含まれている。



12月3日

ヨハネによる福音書は、キリスト教の内的本質を最もよく表したものの。

12月13日

キリスト教の信仰の最もすばらしい点は、人間が自分自身の力をあてにしたり、自分と議論したりする必要がなく、ただ神のみを相手にすればよいことである。われわれにとつて悪とは、自由意志によつて神との親しい交わりを断絶し、破棄することである。

1、健全なキリスト教

6月28日

キリストみずからが欲したキリスト教の独自の点は、まずなんらの狂信をも伴わぬ、全く明瞭で冷静な良識と、次には、超感覚的なものの、表現しがたいものの経験(神秘的なもの)を受け入れるにふさわしい繊細な心、——これら二つのものの結合にある。

12月27日

真のキリスト教は、あらゆる宗教や哲学のなかで、静寂主義(単なる静寂と孤独の生活を維持すること)からも、俗事への心酔(仕事や用事で忙しいこと、それへの没頭)からも、人を守る唯一のものである。

12月29日

キリスト教が明らかに意図したのは、神の庇護と主が常に側近くそばいられることを信じて安らかにその道を行き、できるだけ多くの善をなし、また、教えるよりもむしろ実例をもつて人を励ますことで自分たちの真理を広めるような、そういう人びとの集まりであつた。われわれの将来に迫っているキリスト教の新しい改革も、そういう方向でなくてはならない。

2、ヨハネ福音書15・7の素晴らしさ 1月2日、3月3日、4月9日

「汝等もし我に居り、わが言なんじらに居らば、何にても望に随いて求めよ、

さらば成らん。」(ヨハネ15・7)

3、人生の目標

1月3日

人生の唯一の、道理にかなった目標は、地上に神の国を、つまり、不和と生存競争の国ではなく、平和と愛の国を築くことである。この事業に協力する限りにおいて、われわれの生活は目的と価値とを得ることになる。

6月22日

偉大な目的に捧げる人生、それに必要なもの。

7月12日



全く自由な、気高い性質の人間となることが人生の目標。

12月30日

神の言葉に聞き従い、神の御心を絶えず、まじめに、忠実に遂行すること、ただこの道のみが、およそ人間が到りうる完成へと導くものであり、これ以外のいかなる道でもないということである。他の種類の神秘主義はすべてはなはだしい誤りであり、また、それが非常に素朴で善意のものでなければ、やはり魂をもひどく損うことになる(奥田の注…いわゆる「祈り三昧」、労働もせず祈ってばかり、瞑想ばかりを尊ぶような在り方は危険である)

4、真の幸福、幸福への道

1月31日、2月13日、3月3日、3月7日、5月11日

神のそば近くに在って、有益な仕事をする事。

6月3日

神の積極的な接近は奇跡。

7月10日

深い悲しみの時に、われわれは神に一層近づく。

7月14日

神の命じ給う道を歩いていけば、日々その務めと力とがおのずから与えられる。これこそ最も確かな道である。

12月5日

神およびキリストとともに生きることとは、この世での格別やさしい生き方である。

5、神・キリストに全托し、すべてのことにおいて、感謝と讃美を捧げる。

1月5日、3月15日、3月19日、4月26日

勝利の人生の秘訣。

7月15日、7月24日

信仰とは、神に己をゆだねることである。

11月12日

神から与えられた心情とは、自分の弱さを自覚しながらも、なお、すべての行動と苦難に耐えさせる神の愛と力とにすっかり信頼しきった、おだやかな感情のことである。

11月20日

神に信頼していると、つねに神は私を助けて下さった。この信仰があれば、それ自身すでに一つの幸福である。

12月10日



神の本当のしもべに対する神みずからの信実、まことに大きいものであつて、このような人がただ一人でもいれば、一国の不幸を防ぐことができるほどである。

6、忍耐の大切さ

1月8日・9日、2月9日・10日、3月1日・13日、4月1日、5月1日、11月5日

試練の克服の秘訣、試練の意味。

5月31日、6月21日

喜びよりも苦しみを。

7、地上における天国の始まる時

1月13日

神の御心との合一のみを熱望する時から始まる。

11月19日

神に仕えるとは、持っているすべての力と手段とを、神の御心の成就のために用いる事。

● II 信仰生活

8、神が喜ばれるもの

5月2日、5月5日、6月1日

「神の思い」と「人の思い」。

8月1日

神は自らのために何事も求めず、すべてをわれわれのために欲したもう。

10月5日

神への唯一の捧げものは、人間の意志である。

9、魂(霊)の成長過程

1月17日、2月11日、3月27日、4月15日、5月7日

成長に必要なもの、成長(進歩)の最良の徴候。

8月2日

心の中に神への愛があれば、一切が明らかになり、やさしく、簡単になる。このような境地に達しなければならない。

8月17日

われわれの内に働く神の力の秘密。

8月30日、11月29日

成長には時間がかかる。いつも聖霊の働きに心を開いていることが大切。

10、聖霊は真理の御霊

8月25日



われわれをすべての真理に導き給う

11、祈りの秘訣・祈りの在り方 1月21日、5月29日
10月15日

祈りのときの心構え。

12、日々の心の持ち方(自己の思いをコントロールすること)
2月15日、11月5日、1月3日、4月3日、4月15日

「信じて」歩むか、「見て」歩くか。

1月22日、3月19日、10月23日

朝、目覚めて直ぐに感謝を。

6月8日

日常生活の指針。

13、同情、誠実、信頼、感謝の大切さ 1月30日、2月1日、2月26日、4月7日、

5月14日、10月16日

6月15日

勇気の大切さ。

10月30日

真の温和と親切の大切さ。

5月23日

愛こそが最高の知恵。

6月13日

神への愛のみが自己改善の原動力。

14、神の「親愛」(「怒り」の否定) 2月18日、6月6日

15、善に対する怠慢は最大の欠点 4月10日

11月12日

無気力と傲慢は悪の霊によるもの、断固遠ざかるべし。

16、聖霊の大切さ 2月7日

10月31日

恩寵の光線、驚くべき導き。

17、悪(この世と各個人の)に対する勝利

4月19日

「法理上」と「事実上」の区別

18、老年期の心得 12月1日



要約と解説

「真の幸福とは」（ヒルティ『幸福論 第三部』）

ヒルティ「幸福論 第三部」1899年の「二つの幸福」からの抜粋

（ヒルティ著作集第三巻、1959年、白水社、前田護郎・杉山好 共訳）

「幸福の種類は二つである。一方は常に不完全であつて、この世のもろもろの宝をその内容とし、他方は完全であつて、神がともにい給うことをその内容とする。」

「人生は補強設備を必要とする。」

私たちは、一切の困難に対して、いつでも間に合う援助を必要とするのである。私たちは、自分の幸福の土台を、いつでも、そしてどのような人にも得られるものに求めなければならない。また、私たちの必要とする力は、私たち自身から出てくるものではない。

人生のほんとうの補強設備とは、神がともにい給うこと、および仕事である。

ところで、ほんとうの神を信ずることは、決して容易なことではない。神は、明らかに自分の観念で完全に把握したり、言葉に言い表わしたりできるものではなく、それよりずっと偉大な存在である。

外的な状態が最悪の場合にも存在しつづける、完璧に揺るぎない幸福の実感というものの、これこそキリスト教にだけしか見いだされないものであると思う。

哲学は、「人生の叡智への愛と、その叡智にむかつての絶えざる誠実な努力」というその本来の意義をとうに失つて、そのかわりに非常に知識の高い人々のための学問的な思索場となってしまうている。哲学においては、依り頼む人々にとつて新しい活力の尽きない源泉である、常に変わらず、また朽ちない永遠の霊的存在からの支えが見いだせない。

この霊的存在は、その現実の力によつて経験されることができ——また、そもそも経験される以外にない。全く比類のない幸福の実感は、神がともにい給うことと不可分であり、神の存在に対する最善の証明として、何よりも不可欠のものである。

「神がともにい給うこと」は、聖書の数多くの個所で、可能な事として明白に約束されているばかりではない。それはすでに多くの人がその人生の歩みのなかで、恵みとして経験した事であり、現在でも、それを経験しようと欲するすべての人に対して、現実によつてくる事なのである。

それは、まず否定的に、神から全く遠ざかった人生がいつも何か不満足な性格



を持つているという事実において現われる。

また、外的な境遇に恵まれた人々にとつても、肉体が衰え、感覚の一部分が利かなくなり始めると、急速に絶望の影が増大し、最後に来る完全な絶望に脅かされるのが常である。……多数の人々は、絶えざる怒りや不機嫌のとりことなり、それが自分の魂の基調となつてしまつて、家族や目下の人々にとつて厄介者となる。

力は外から来るべきであつて、減少してゆく自分の貯えのなかからは汲み切れない。

どんな人であつても、神から来る力なしには、右のような一切の運命をすつかり免れることはできない。その力はまさに肉体の弱さと老年においてこそ以前よりもさらに強く働き、生氣と励ましを与え、最後の息をひきとる時まで心をいつも喜ばしさと希望で満たすからである。この喜ばしいそして力強い精神を、自身のなかで無理に作る必要がなくて、いわば外から受けられることは、すばらしい事実である。

私たちの愛するすべての人々のために、この人生が与える最善のものを持たずに、すなわち神が絶えずともにい給ひ、神に対して平和を得ているという実感を持たずに、世を去ることのないよう、切に願わずにはいられない。

神がともにい給ひことをひとたび経験した人は、それを再び忘れないであろう。そしてそののちに務むべきことは、その経験を持続すること、言いかえれば、この霊的存在がまた退かないように生きてゆくことである。

よりすぐれた声に聴き従う人々にとつては、人生は極めて単純な三段論法の歩調をとりはじめる。心が神から離れると——それはしばしば無意識的におこることであるが——この人々は幸福でなくなる。その時は、何かがこの人々と神との間に挟まっているのであつて、これは取り除かれなければならない。それに反して喜ばしい心の状態であれば、自分が正しい道におり、ここで本当に悪いことは決して起こりえないということを知るのである。

こうして暗い人生に太陽の光がさしこむ。絶え間ない悲しみの心の代りに、喜ばしい霊が生まれる。この喜ばしい霊を持った人は、その時から軽やかな足どりで、この人生の一切の困難を切りぬけて行く。先ず「その地上の分」(伝道の書3・22)である自己の仕事への喜びを感じる。そしてまた、以前は多くの不安と心配をもつて獲得しあるいは固執しようと努力したその他の一切のものをも、天与の賜物として勞せずを受け取る。しかも、それを真実に王者らしく享受する強さと力を同時に与えられる。これによつてはじめて一切の所有物は正当となり、人間は、その奴隷である代りに、その主人となる。また、多くの人が不必要に思いわずら

う「人生の正当な楽しみ」も消失するわけではない。ただより勝れた、確実なものとなり、恐怖や良心の疚しさなどの混入することがなくなるのである。マタイ 6・32、33の言葉がその時から、この上なく単純な人生の知恵となり、幸福な生活への指針となる。しかしそのためには、神に対する確固たる信仰と神の絶えずともにい給うことが不可欠である。それがなければ、思いわずらいをしないことは、愚かであろう。だから、信仰を持たない、健全な常識人はその戒めに反対する。またこの信仰を持つと思い込んでいても、それが言葉だけのものにすぎない多くの人々にあつても同様である。神に対する真実の信仰と神が現実にもいに給うことがなければ、その戒めを実行することは不可能である。

こうして、もう一度全部を総括して考えれば、この世で得られる持続的な幸福は、たゆみない有益な仕事と、それに絶えず神がともにい給うことが結合した状態である。

この二つの中心的要素が兼ね備わっているときには、どのような種類の人間生活においても、一切が善となる。両者の結合が完全であるほど、万事はいよいよ善である。この人生がそこから離れるほど、その善は減少する。これは、歴史を考察することによって、または日常の交際をとおして、誰にも実証できる事実である。

それ以外の一切の幸福は、その性質上一時的のものであるか、あるいは、錯覚に基づくものである。真実の幸福への補助的な役目をしたり、すでに心のうちに存在しているものを外側から完全に仕上げることはできるかもしれないが、その本体にとつて代ったり、またそれがなくなったために本当の幸福が破壊されたりは絶対にしない。

本当は誰もがそのことをよく知っている。しかし、それを自分の問題として受け取り、実在の世界の確固とした地盤に足を踏み入れる勇氣を持つ人は少ない。多くの人はむしろ、この地上の生活の苦しみに満ちた状態を詩や文章によつて悲しんだり、瞬間的な享樂によつて一時的にそれを忘れようとしたり、もっぱら空想や回想にふけて生きようとしたり、また、少なくとも他の人々よりすぐれた「特別の」階級の人間であるという誇らしい意識に酔おうとしたりする。しかしわれわれの宣べ伝える幸福は、それを得ようと欲するすべての人々にとつて存在し、「世が与えることのない平安」なのである。



ご案内

2012年7月 夏季福音特別集会（京都）のご案内

2012年7月1日（京都）

京都では、今年、奥田幸子姉妹、森下一男兄弟を相次いで天に送るという大きな試練に見舞われました。その中で、私たちは、日々の歩みにおいて、とりわけ日曜日ごとの聖日集会において、御霊の主のご臨在と導きを祈り求めてまいりました。そして、今一度、福音の原点に立ち返り、

「^{みことば}聖言^{みたま}聖霊は わが^{いのち}生命なり」（召団讃歌A33の7節）

を一人一人が体得し、日々の生活の中で実践していくこと、そして、聖書とくに新約聖書を「聖霊の光に照らされ、聖霊の導きの下で」読み、咀嚼^{そしゃく}していくことの大切さを実感しています。併せて、この生命なる福音を、日本の社会に根付かせ、次代に伝達していくことの大切さと困難さを自覚しています。このことを果すためには、私たちは、聖書、特に新約聖書を「正しく」理解する、読み解く必要があります。それなくしては、間違^{まちが}った、偏^{ひとへ}った、見当違いの「信仰」、ときには熱狂的な「狂信」に陥りかねません。

マタイ、マルコ、ルカの各福音書（共観福音書）は、律法遵守が絶対価値として信奉されていた旧約時代のなかで、神の無条件・絶対の愛を体現し、ご自分に全身的に依^よりする者に無条件の赦しと生命^{いのち}を約束されたイエス・キリストの御言葉と御業^{みわざ}を証言しています。いわば旧い時代の教えから、新しい時代の生命^{いのち}の光への転換を告げる「神のドラマ」の展開の記録が共観福音書だと言えます。そして、ヨハネ福音書においては、永遠の生命^{いのち}の光が輝き、満ち満ちています。

イエスの御言葉と御業は、神の国の迫り、終末の迫りの自覚の下で発せられ、為されました。私たちが新約聖書を読み、福音書のキリストの言葉や御業に接するときには、このような時代背景と状況をよくわきまえた上で、現代に生きる私たちにとって、なお、永遠なるもの、すべてに勝る「宝」であるキリストの「聖言」を食らい、「聖霊」に導かれて生きることが必須であり、それを願ひ、祈り求めます。

今年の夏季特別集会が、以上に述べた願いと祈りが成就するような二泊三日の集会となるようにと願っています。参加される皆様には、全参加が基本であるとの自覚のもと、熱い祈りをもってご参加いただけますように、ここにご案内申し上げます。



講筵資料

2012年8月 夏季福音特別集会

2012年8月24～26日（京都）

1 聖書に証言されている神

ミカ書4:5

「^{すべて}一切の民はみな各々その神の名によりて歩む。然れども我らは、われらの神エホバの名によりて永遠^{とこしえ}に歩まん。」

（「どの民もおのおの、自分の神の名によりて歩む。我々は、とこしえに我らの神、主の御名によって歩む。」）

旧約聖書は、イスラエル民族を「己が民」として選び、その民に自らを神として顕し、語りかけ、御意^{みこころ}を悟らせ、ただこの神のみを神として信じ、御意に従って歩むようにと導かれた神（ヤウエー）とその熱愛・聖意に応え得ない民の歩みを記録した民族史という面をもっている。しかしながら、イスラエル民族に自らを神として示された神は、決してイスラエル民族のみの神、民族神という限定された神ではなく、われわれ異邦の民族にとつても、唯一の真の神であり給う。では、なぜそう断言できるのか。

われわれは、新約聖書を通してイエス・キリストを救い主・贓い主として、この方に帰依し、イエス・キリストに顕れ給うた神を真の神として崇める。この神と、旧約聖書の神とは同じ神なのか。旧約聖書と新約聖書とはいかなる関係にあるのか。このことについて、明確な理解をしておきたい。

以下には、小池辰雄著『無者キリスト』（河出書房新社、2001年復刊）第三部「無的実存」の第三章「三一神の所在」（325頁以下）から要点を拾ってみる。

「我々がここに意味する神は、絶対的な実在としての最高次と信ぜらるべき神のことである。そのような実在は、自らを相對界に自現するのでなければ、我々相對的な存在はこれを知るよしもない。聖書に証言されている神は、イスラエルの歴史を通して自現なされた啓示の神で、まずこのことに注目して、神の声、神の手として現じている事態に驚き、そのドラマチックな現実を自ら今の現実として再体験しなければ、聖書に証言されている神に出会うことはできない。聖書は現実^{じげん}に我らに迫る現実の書であって、単に歴史的記述の書ではない。

「神はいずこに」——聖書を通して現実^{じげん}に我らに自顕しつつあり給う。（325～326頁）

「おまえはいずこにいるのか」（創3:9）



……と問われ、たずねられ、つかみかかられたとき、その深い愛の顧みの前に平伏し、圧倒されて、抱きあげられたときこそ、「神はいずこに」の間はおのずから消え去って、「我は汝のみ手の中にあり」と叫び、「神は」といつて三人称的に問う角度の間がいかに的外れであるかを知らしめられるのである。……

そのようなわけで、旧約聖書において、神に呼ばれた一連の人々こそは、預言者たちであつた。」(325～327頁)

アブラハムの召命(創世記12・1～4)

モーセの召命(出エジプト記3・1～)。ミデアンの地に逃れたモーセに、神の使(天使)がホレブの山(シナイ山)に近い荒れ野において、柴の燃える炎の中に現われ、エジプトの地で苦役に悩むイスラエル民族を解放するようにとの使命を授け、神は力ある数々の御業を通して「出エジプト」を達成し、民に十戒(十言)を与えて「命への道」を示した。

「²エホバこそはわが力、わが歌なり、彼はわが救となり給えり。彼はわが神なり、我これを讃えん、彼はわが父の神なり、我これを崇めん。¹¹エホバよ、神の中に誰が汝に如く者あらん。誰か汝のごとく聖くして栄えあり、讃うべくして威ありて不思議を行う者あらんや。¹³汝はその贖いし民を恩恵をもて導き、汝の力をもて彼らを汝の聖き居所に導き給う。」

(²主はわたしの力、わたしの歌、主はわたしの救いとなつてくださった。この方こそわたしの神。わたしは彼をたたえる。わたしの父の神、わたしは彼をあがめる。……)

……¹¹主よ、神々の中にあなたのような方が誰かあるでしょうか。誰か、あなたのように聖において輝き、ほむべき御業によつて畏れられ、くすしき御業を行う方があるでしょうか。……¹³あなたは慈しきをもつて贖われた民を導き、御力をもつて聖なる住まいに伴われた。」(出エジプト記15・2～13抜粋)

「モーセによる出エジプトはイスラエル民族をその隷属の苦境から解放して自由を与えた歴史的恩恵の事実であつた。アブラハムの出ハランは旧き伝統因習からの解放であり進展であつた。個人の人生でも、伝統を乗り越え、苦境を突破して、進展し創造してゆくには、神・キリストの力の中に出我し投身することを要する。福音はこの力にある。」(小池辰雄「聖書は大ドラマである」1月20日52頁)

「天来の権威ある言の前に平伏す魂は神的権威を与えられる。人間の側からは限定できないもの、神という名称すら暗号である無限定者からの権威ある言、これが聖書の言である。そういう言を示され、圧倒されて、神の霊的人格な言を告知していたのが、アモス以降の預言者たちであつた。そういう神の霊的な力を現



わたしたのがカリスマ的人物であった。エリヤ、エリシヤの如き。(中略)

ところで預言者たちのあとに一人の人があらわれた。それは超預言者ともいうべき人であった。ナザレのイエスである。……ナザレのイエスにおいて自らを啓示した神は、人間の側からの探究に絶した神である。「神はいずこに」、それはナザレのイエスに自現しておられるというのほかはない。イエスにおいて神をまざまざと見ない人は、ついに神に出会うわけにはゆかない。……

ヨハネ伝14・6。イエスは父なる神への道であり、まことに父なる神からの道でこそある。真理の具現者、真理そのものの、生命の実証者、生命そのものである。……イエスを見た者は神を見たのである。……ヨハネ伝10・30「我と父とは一つなり」。……

イザヤ書第40章から第55章に極まった「主の僕」の預言にイエスを見、イエスにおいて神を見る。……

神よ、汝は、イエスに現われ給うた。……そしてイエス・キリストは宇宙的な存在である。……

我らのこの宇宙的キリストは同時にいとも身近に深い深いおもしろいやりをもって荷つて下さる。すべった、ころんだ、泣いた、もだえた。そんなとき我らを抱き、みたまをそそいで天的な力を与えて下さるこのイエスこそ、われらの神である。一切を包摂し給う主、ここにまことの神を我らは拝する。」「(『無者キリスト』329～334頁)

使徒言行録7・1～53…ステファノの説教。アブラハムからモーセによる出エジプトに至るイスラエル民族の歩みと、ダビデ、ソロモンによる神殿の建造などが語られている。このように、イスラエル民族にとって神は、民族の歴史の中で、民に具体的に働きかけ、語りかけ、行く道を示し、苦難に在ってはそこから救出し、道を誤れば(特に偶像崇拜、他の民族の神々に心惹かれることに対して)、審判を下す神であった。

旧約聖書は、イスラエル民族にとって神の啓示の書であり、民族の歴史書である。では、われわれ異邦人にとつては、イスラエル民族の神が、何ゆえ、異邦人にとつても神であるのか。イスラエル民族に現れた神が、異邦の諸民族にとつても神である、というためには、その内実が、イスラエル民族の神(民族神)という限定を超えた、普遍性をもった神、人間が人間である限り、すべての人間にとつて、崇敬し、帰依しうる、そうせざるを得ないような内実をもった神であらねばならない。

イスラエルに自らを現わした神(ヤーウエーとかエホバと称される)は、本来、宇宙・万物の創造神であり、全人類・全民族の神であるべき根源霊とでもいふべき方であった。それが、故あって、最初、イスラエル民族に対してのみ神として自己を現わした。いわば、自己限定をなさっていた、と言えるであろう。しかし、そのイスラエルに対する導きの中に、す



でに高次の、普遍的な内容・性質の啓示がふんだんに示されていた。

モーセの召命において、示された神の名(出エジプト3・14)、「我は在りて在らしむる者なり」または、「我は在らしめて在る者なり」(『無者キリスト』374頁)、そしてモーセに賜った十言(十戒)において、神は自らを無形・無相の霊神であることを示し、偶像を彫らないように求めている。モーセに賜った十戒の根本は、神のイスラエル民族に対する「信愛の断言命法」であった。

「神はイスラエルの民を愛し信じて語っているのです、本来道徳的な律法的な誠ではない。モーセの律法の根本精神は隠れた福音である。」(小池辰雄『聖書は大ドラマである』1月21日、54頁)

イザヤ書(その中の「第二イザヤ」以下)において、神は狭い民族神の枠から解放されて、天地万物の創造主・創造神へと突き抜けた存在者として自らを啓示している。背信(背神)が罪であり、同時にこれを贖い赦すこと(贖罪)による救いが啓示されている。そこでは、「義」と「救い」とが同義に用いられている。

第二イザヤにおける「主の僕」^{しもべ}の詩(42:1～4、49:1～7、50:4～9、52:13～53:12)を、イエスは、自分に関わる預言として受け取り、「主の全き僕」として、神に対する絶対の信従の道を歩まれた。とくに、52章13節～53章12節は、

「全イザヤ書66章の心臓部であり、旧約聖書の絶頂であり、新約聖書とその福音書の焦点たる十字架のキリストへの預言である。」(『聖書は大ドラマである』8月9日、

286頁)

イエスは紛れもなくユダヤの民(イスラエル民族)の一員でありながら、ユダヤ教の壁を突き破り、十戒(律法)の根本精神を「神の絶対愛」と「神への絶対の信と従順」においてとらえ、それを体现した。

マルコ伝12・28～31に記されている神の戒めの最大なるものについてのイエスの回答。

「第一は是なり『イスラエルよ聴け、主なる我らの神は唯一の主なり。なんじ心を尽し、精神を尽し、思いを尽し、力を尽して、主なる汝の神を愛すべし。』」

(申命記6・4～5)。第二は是なり「おのれの如く汝の隣を愛すべし。」(レビ記

19・18)。この二つより大なる誠命^{いましめ}はなし。」

マタイ、マルコ、ルカの三つの福音書(共観福音書)のイエスの言葉は、ユダヤ教の学者(律法学者)や祭司達との問答の中で語られており、共通の前提はユダヤ教という宗教、とりわけ、モーセ律法であったが、その受け取り方が正反対と言えるほど異なっていた。イエスは「律法」の中に、神の人(イスラエル民族)に対する深い信愛を受け取り、それは、ひとりイスラエル民族に対するものにとどまらず、すべての人(異邦人も含めての)に対する神の信愛の表れとして受け取った。マタイ伝5章～7章にまとめられているイエスの言葉はユダヤ教の学者や指導者層との論争ではなく、弟子たちや群衆を前にして語り出されたとされている。その内容は、旧約の律法を完全に乗り越えた全人類的・普遍的内容のものとなつて



いる。そしてイエスは、その内容を完全に身をもつて実践し、全うされた。

われわれは、イエスにおいて、人の「神に対する全き信愛・信従」の姿を見る。同時にイエスにおいて、神の「人に対する絶対愛」を見る。

ヨハネ福音書においては、イエスは神を「父」と呼び、また、「我を遣わし給いし者」と言い、「子」であり、同時に「僕」であることを示され、貫かれた。「我を見し者は父を見しなり」「父と我とは一つなり」と語られ、ご自身が「神の全き顕現」であることを示された。その消息を伝えているのがヨハネ福音書である。

アブラハム、イサク、ヤコブの神として顕れ、やがて僕モーセを遣わしてイスラエルの民をエジプトでの苦役から救出し、他のもろもろの神々ではなく、「汝らの神である我をのみ拝すること」(拝一神)を求めた神は、イエスの出現までは、まさにイスラエル民族にとつての神であり、異民族は排除されていた。イエス自身も12弟子を遣わすにあたつて、

「異邦人の途にゆくな、又サマリヤ人の町に入るな。むしろイスラエルの家の

失せたる羊にゆけ」(マタイ10・5～6)

と命じ、また、イエスがツロとシドンとの地方に往き給うたとき、カナンの女が娘を助けてほしいと懇願したさい、「我はイスラエルの家の失せたる羊のほかに遣わされず」とつれない言葉を発して一度は拒絶した。しかし、女の切なる願いの言葉に感動して、「女よ、汝の信仰は大いなるかな、願ひのごとく汝になれ」と女の願ひに応えた(マタイ15・1～28、マルコ7・24～30)。有名な、百卒長の病める僕を癒された逸話もそうである。イエスは、表向きはイスラエルの救いのためにとの限定を自らに課しながらも、イエスの中に充滿する神の愛は、全身的に求める魂に対しては、イスラエルか異邦人かの区別なく溢れ出た。復活(霊体となって顕現した)のイエスが、弟子たちの心を開いて語られた言葉は、

「⁴⁶聖書(旧約聖書)にかく録されたり、キリストは苦難を受けて、三日目に死

人の中より甦り、⁴⁷かつ、その名によりて罪の赦しを得さする悔改めは、エルサレムより始りて、もろもろの国人に宣べ伝えらるべしと。⁴⁸汝らはこれ等のことの証人なり。⁴⁹視よ、我は父の約し給えるものを汝らに贈る。汝ら

上より能力^{ちから}を着せらるるまでは都に留まれ」(ルカ24・46～49)であつた。

これを承けて、使徒行伝では、

「聖霊なんじらの上に臨むとき、汝ら能力^{ちから}を受けん、而してエルサレム、ユダ

や全国、サマリヤ、及び地の果てにまで我が証人とならん」(1・8)

とのイエスの約束が語られている。

使徒行伝は、まさに聖霊がペテロやヨハネを通して(3章～5章)鮮やかに働き給い、さらにステパノの殉教(6・8～7・59)、ピリポの伝道(8章)、ダマスコ途上でのキリストのパウロへの顕現とパウロの回心、それに続くダマスコでのパウロの伝道(9・1～22)、ルダ



とヨッパでのペテロ(9・31～43)、カイザリヤのコルネリオの祈りとペテロによる聖霊の降臨(10章)など、実に聖霊(キリストの霊)が力ある御業を通してひろく異邦の民にキリストの福音を証しされて、キリストこそが万民の救い主であること、キリストに顕れ給うた神が、唯一の真の神であることが活き活きと描かれている。

ローマ書においては、イエス・キリストこそが、万民の救い主であり、その救いは、ユダヤ教徒の信奉する「律法の遵守」によつてではなく、ひとえに神の恵み、絶対恩寵の故であること、イエスの十字架による贖罪と生命なる聖霊の授与こそが、救いの源であることが示されている。

このように、イエスにおいて自らを顕わされた神、これこそが我ら異邦人にとつても、帰依・帰入・献身するにふさわしい神である。イエスこそは「神の現象体」にして全き救い主、「主」である。

●Ⅱ 聖霊の光の中で聖書を読む

1、終末の迫りの中で

イエスの伝道、福音の告知は、歴史の終末の迫りの中でなされた。「終末の迫り」という緊迫感がなければ、福音は浮いたものになってしまう。

小池辰雄『聖意体現―主の祈り―』(1959年)において、「汝のみ国が来らんことを」(マタイ6・10上)の解説において、次のように述べられている。

「み国」は「王国」とか「支配」とかいう語である。「汝」が一切の君主として君臨し、支配統御し給う国の到来を、との祈である。イエスの伝道の第一声は、ガリラヤ湖畔における「時は満ち、神の国は近づけり、汝ら悔改めて福音を信ぜよ」であつた。福音とは、イエスにとり、神の国、天国、み国の嘉きおとずれである。そしてイエスこそは、み国の告知者であり、体現者であり給う。み国を待望する現実の終末的倫理は、あの山上の垂訓に(マタイ5・3～7・27)あきらかに示された。この「主の祈」はいわばその垂訓の心臓である。イエスはこの終末的倫理を自ら実存し、神の国のおとずれをあの数多きたとえ話をもつて観念的にではなく、具体的に受肉的に、暗示し、象徴し、神の国における永遠の生命の相をしるしとして実証し、また保証したもうた。(中略)

彼の一切の大能のわざ、神癒のわざは、神の聖旨、聖愛の発露であつた。それは神の栄光のあらわれとして、終末的性格のものであつて、断じて現世的御利益的な霊力ではない。これにつまずいたのが、おのれを義とする祭司、学者、パリサイの徒輩であつた。キリストは、霊肉一体としての全人の救を、み国において、新天新地到来のあかつきにおいて、約束し給う。同時にその実存は、地上において、我らの霊のためには倫理という語ではつつみきれない高次のいのちの霊言をもつ



て、我らの肉体のためには、その聖なるあわれみの霊力をもって、み国と同質のものを示し給うた。

「活かすものは霊なり、わが汝らに語りし言は霊なり、生命なり」(ヨハネ6・63)

である。

「わが言をききて我を遣わし給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもちかつ審判に至らず、死より生命に移れるなり」(ヨハネ5・24)

ヨハネ伝によれば「み国」はかかる「永遠の生命」の現実性において示されている。

「我は復活なり、生命なり、我を信ずる者は、死ぬとも生きん。およそ生きて我を信ずる者は、永遠に死なざるべし」(ヨハネ11・25)

の如き聖言は、ラザロの復活という大能のあらわれの際に発せられた。キリストの言動は根源的なそのような終末の聖国の角度から語られ、かつ行ぜられていた。」

(21～22頁)

「終末」についての解説(同65～66頁)

「端的に申せば、私たちは、いつでも「終末」に面している。質的には、我らの罪性のゆえに死という終末に面して一日一日を暮している。「罪の価は死なり」とパウロが言ったように、この「死」の終末は審判性をもっている。しかもそれは歴史的にも真実で、我らは世界の歴史がいつその様な、神の大審判、最後の審判につきあたるか知れない。歴史というものも、この終末の総決算なくして意味をなさない。歴史的とはこの終末という究極を目ざしているという意味を土台とする。それ故に歴史はかかる終末に直面して進みつつあること、あだかも個人の生涯において死に直面しつつ歩いているのに類似する。それ故に歴史的現実というものとは同時に根源的には終末的現実として自覚されねばならない。

そして罪性の質的終末性を負う信仰者は、併しキリストの十字架で、その贖罪の恩恵によつて、終末性をつきぬけた。キリストの永遠の生命(義の実質)により永遠性がこれに勝った。かくて今や終末性は我らの肉体の死にもかかわらず、我らをおびやかさなくなった。その反対に、終末性は却て恩恵の性格を以て受けとれるに至った。即ち、我らの死にも関わらず、世界の歴史の審判にも関わらず、キリストの恩恵を受けた者には、永生の歓喜と、新天地の大希望が、終末のゆえにこそ転回してくるからである。終末的実存としての我は、キリストの十字架の死と共にすでに終末をもち、もつことによつてのり越えて実存するという我なのである。

『常にイエスの死を我らの身に負う。これイエスの生命の我らの身にあらわれ



ん為なり』（コリント後4・10）

が終末的実存の相である。そしてそれは同時に歴史の終末に於ける偉大なる神の国とその栄光を待ちのぞんでいるという偉大な終末への実存なのである。

『³汝らは死にたる者にしてその生命はキリストと共に神の中に隠れあればなり。⁴我らの生命なるキリストの現われ給うとき、汝らもこれと共に栄光のうちに現われん』（コロサイ3・3～4）

とある通りである。このような終末的な現実と未来の中に在ることが終末的という事態である。」

2、キリストの福音の天的次元

山上の垂訓の中のキリストの言葉：

「⁴³『汝の隣を愛し、汝の仇を憎むべし』と言えることあるを汝ら聞けり。

⁴⁴されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝ら責むる者のために祈れ。⁴⁵

これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父は、その日を惡しき者の上にも善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給うなり。⁴⁶なんじら己を愛する者を愛すとも何の報をか得べき、取税人も

然するにあらずや。⁴⁷兄弟にのみ挨拶すとも何の勝ることかある、異邦人も然するにあらずや。⁴⁸さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。」（マ

タイ5・43～48）

イエスの心は、

「天の父の全きが如く全くあること」

それは、無差別・無条件の愛であった。このイエスの求めには、誰も合格することができない。ただ、イエスの前に降参するほかない。イエスにおける神の「み思い」はかくも「人の思い」とはかけ離れた絶対的・無条件的なものであった。我らの内なる「肉」（生まれながらの人間の本性）は、神の靈性（愛）にふさわしくない。神の要求を満たし得ない。にもかかわらず、神は、キリストを通して、「お前を天の父の全きが如く、全き愛の姿に作り変えるからね」と我らに呼びかけ給う。キリストの言葉には、すべてそのような「愛の本願」が込められている。

「汝らは世の光なり」（マタイ5・14）

もそうである。「私がお前の中で輝くから、お前は光となるのだ」ということ。そうすると、これらの御言葉が我において成就するには、どうしても、キリストの十字架の贖いを100パーセント受け取り、同時に聖霊を頂かなければ、始まらないことがわかる。

3、福音書を身読する



「身読するとは具体的にはどういふことなのであろう。福音書というドラマの中に投身するということは、その歴史的現実を現在の現実としてその中に身を投ずることである。しかもイエスという人物に直ちに接することである。そのとき、我々はこの驚くべき人物の水をわらぬ断言的な力あることば、不思議な力ある愛のわざ、そういった現実につかつて驚嘆し、感激し、驚倒するはずである。キリストの圧倒的な愛の言と業にとらえられ、圧倒されて、回心を起こす。恵信一貫一如！キリストは神霊の人である。神言の人である。神の心の人である。神の行為者である。福音書をよく読んで驚かない人は、そのこと自体が、聖書の伝える現実を現実として読んでいないことであり、ドラマとしてその中に自分を投じているという態勢ではないのであつて、聖書に対する第一歩において贖いているのである。」(小池辰雄『無の神学』第二部「無の神学への道」第8章「キリストの福音」458頁)

● Ⅲ 聖霊のバプテスマと祈り

1、聖霊のバプテスマ(小池辰雄『無の神学』の「キリストの福音」464～466頁より)

「『福音』とは、キリストが語った言や、なした行為より以前に、キリストそのものが福音なのである。彼の存在そのものが福音体なのである。だから福音を信ぜよとは、端的にキリストを受けよ、ということ、「この私を、キリストを受けよ」ということなのである。そのためには何よりも福音書に現れている全キリストにぶつかつて、彼の言行の一切、その十字架、その復活の事態がいかに高次な次元のものであるかに驚嘆驚倒して彼の前に無条件に降伏するのでなければ、彼を信ずるといふことが本ものにならない。

……まごころの祈りを以て、端的にキリストを信じ受け、キリストの中に自分を投入するにある。イエスは、十字架のイエスは「心配は要らぬ、私がおまえというものを、おまえという罪そのものを、この十字架で根こそぎ贖いとつた。完全にゆるした、救いあげた」と言つて下さる。こうして彼はその救の聖手で必ずその人をつかまえて、自由な、晴れ晴れとした驚くべき歓喜の現実にとり入れて下さる。首をあげて見よ、そこには復活の主が笑顔をもつて立つておられる(これ何れも神秘的な霊幻を言っているのではない)。まばゆい光がさしている。その光はわが全身にしみとおる(これも内的霊的な意味において表現したわけである)。これ、愛の聖霊である。あるときはそのために電気に打たれたように全身にしびれを感じることもあろう、異言がほとばしつてとまらないようなこともあろう、霊歌をうたい出るようなこともあろう、歓喜の涙にむせぶこともあろう。私は現象面を問題にしているのではない。とにかく何かは知らず、根源的に新しくされたことを感じ、何かは知らず、新しい生命力をあたえられ、聖霊の実在をはつきり身にお



ばえるようになる。聖霊のバプテスマはこのように贖罪の十字架の主、永遠の生命を与え給う復活の主の深いあわれみにおいてのぞむのである。……

人間はしかし死にいたるまで罪びとにすぎない。聖霊のバプテスマをうけたからとて、直ちに人間が聖化したものになるわけではない。しかし、みたまを受けただかぎり、救の確実をその人は信じ得て、躓いてもころんでも、前進する人間となる。大切なことは、祈りを以てつねに新たに聖霊を受け、聖言(聖書)を通してキリストとの交りを御霊に在ってなしてゆくということである。」

2、祈り(同467～468頁)

イエスはこうして神の言を聞くことが出来たか。神の言はことごとく霊言である。であるからイエスに神の霊が宿っていなければ、神の霊言を聞くことはできなかった。それならどうして神の霊が宿っていたか。それは絶えず彼が祈る人であつたからである。祈るとは神とたましいの会話をする事である。口さきの祈りではない。たましいが自分の扉を開いて、あるがままの自分を神に全托して、信頼してたましいが語るのが祈りである。この深いたましいの信愛において神様はみたまを賜る。聖霊を求めるといつても、自分をさらけだして、ただ主様をよろこぶたましいとなると、聖霊は与えられる。ただいつも大切なことは、何らかの意味において贖罪の十字架が祈りの場となつてゐるということである。「聖名に在って」という祈りの言はつけ加えではない。キリストの「聖名」は贖罪をもつ「聖名」であり、聖霊をもつ「聖名」であるから、「聖名に在って」はいつも祈りの土台であり原動力である。……

……イエスのたましいは、たましいの根源たるものを「わが神」と呼び「父よ」と呼んでこれにすがつた。それが祈りであつた。祈りはたましいの声である。そしてそれはたましいの根源者との深い交りを要求するものである。電源に対してスイッチが開かれれば、電灯が点るように、この祈りに応えて神は霊であるから、霊を以て応え、聖霊を惜しみなく与える。

「神、み霊を賜いて無量である」(ヨハネ3・34)
とある通りである。」

3、霊の貧者(同471～472頁)

「幸なるかな、霊の貧しい者よ、天国はおまえたちのものだ」(マタイ5・3)

「……私たちは、どうしたらいいのか。イエスの中に投我するほかない。……十字架という門から入るのである。……あるがままのどうにもならない自分を、この十字架という贖罪の門を通してキリストという驚くべき愛の生命の中に棄てる



ことはできる。これは無条件の愛の抱擁だからである。あるがままのどうにもならぬ自分が、キリストという生命の実体の中へ閉じることのない十字架という門を通って、救いあげられることだからである。……わが魂は、十字架の贖いで自我から解放され、絶対恩恵としての無私を賜わる。すると同時に、門の彼方は天国、キリストの復活の生命のあふれているところ、聖霊が充満しているところであるから、聖霊を豊かに賜わる。文字通りみたまが自分の中にみちあふれる。パウロの「われキリストの中に」「キリストわが中に」という表現はみなこのような現実をいうのである。キリストの宇宙は、霊気の遍満し、霊光の遍照し、白熱的生命のみなざる霊的空間である。こういう現実が身辺に、身中に自由自在に展開して、自ら天国をそこに展開し得るすばらし事態を体験体现することになる。……

このようにして「幸なるかな、おまえ、私の十字架で霊が無私という貧しさとなった者よ、天国即ち聖霊のわれキリストがおまえの中に宿っているぞ」という絶対恩寵の力づよい霊言として体受される！……私はこれを体験して俄然、聖霊の世界に突入せしめられた。「われは門なり」というキリストを通し、キリストの中へ入った。「われは道なり」というキリストに在って、キリスト教ではなくキリスト道という身につける真理を体で知った。「われは生命なり」というキリストの生命を生命とするに至った。これはみな思恵の事実である。」

4、聖霊は愛の霊(同474頁)

「聖霊は愛の霊である(ロマ5:5)。みたまにおいての信の世界の性格は愛である。聖霊を証する者は、愛の実存を以てすることになる。聖霊にあつてたまわる^{カリスマ}賜には、さまざまな働きがある。……聖霊の賜は、何でもその人にふさわしいものとして与えられる。聖霊そのものは一つである。しかし、最も大なるもの、そしてこれのみは聖霊を与えられたら誰にでも与えられるもの、それは愛^{アガペー}である。愛はみたまの属性ではなく本質であるからである。であるから聖霊の証者たるは愛の人であるということである。愛の人が必ずしも聖霊の人ではないが、聖霊の人は、力ある荷いの、包摂の愛^{アガペー}の人である。救をもたらす人である。」



解説

2012年11月 サムエル記上 解説

(主として、『口語 旧約聖書略解』による)

2012年11月11日 (東京新宿)

1・1～3・21 サムエルの幼年時代——誕生・献身・召命

1・1～8 サムエルの両親

「二人の妻」…ハンナに子が無かったので、他の妻をめとったと思われる。聖書に記されている多妻の例(アブラハム、ヤコブ、ギデオン、ダビデ、ソロモン等)のほとんどすべては、それが家庭に不和不幸を生じ、良くないことを伝えている。

「万軍の主」…万軍とは天の衆軍、日月星辰あるいは天使のこと。

「犠牲を捧げる日」…礼拝者が共に食することを許されているのは酬恩祭の感謝の犠牲のみであるゆえ、これは感謝の犠牲を指す。犠牲の一部は祭壇で焼き、一部は祭司の有に帰し、他は供えた者の分となり、家族あるいは団体が共に食する慣例であった。

「悩まして」…ハンナがエルカナに愛されるのをねたみ、その子供がないのを卑しめ苦しめた。

1・9～20 ハンナの祈りとその結果

「一生のあいだ主にささげ」…祈りが応えられるとき、神に何物かを献げる誓願の例は、ヤコブ(創28・20～22)、アブサロム(サム下15・8)等がある。

「かみそりをその頭にあてません」…サムエルがサムソンの如く生涯ナジル人であることを母が誓ったものと思われる。ナジル人とは聖別された人という意味で、特定の期間、主に自分を聖別する誓いを立てたが、隠者にはならず人間社会の中に住み、必ずしも禁欲的ではなかった。聖別の期間中はぶどう酒と濃い酒を飲むこと、葡萄の実から生ずるものを食べることが禁じられた。また頭髪を剃ってはいけなかった。長髪は主に聖別されたことの見えるしるしであった(レビ19・27、土18・23、申15・19)。人は一定の期間だけではなく、生涯ナジル人であり続けることもできた。バプテスマのヨハネは、生まれた時からナジル人として聖別されていた(ルカ1・15)。(ナジル人の説明は『聖書辞典』による)

1・21～28 サムエルを神に献げる

「乳離れするまで」…3歳になるまで乳を飲ませるのは普通であった。

2・1～10 感謝の歌

後の編者の挿入したものと解されている。マリヤの讃歌はこの歌によったことは



明らか、とみられる。

2・12～17 よこしまなシロの祭司―エリの子たち

2・18～21 幕屋で仕えるサムエル

2・22～26 エリの訓戒にその子らは耳を傾けない

2・27～36 エリ家の滅亡の預言

3・1～10 サムエルの召命

3・11～18 エリ家の運命についての幻

3・19～21 預言者サムエル

4・1～7・1 ペリシテ人の侵入

この3章は一つのまとまった歴史を示すものであるが、前の部分の資料とは関係のないこと、すなわち異なった資料から採ったものであることは、この部分ではサムエルに少しも言及していないことなどから知られる。

4・1～11 イスラエル軍が敗れて神の箱を奪われる。

4・12～22 敗戦の結果

5・1～5 神の箱とダゴンの像

5・6～12 神の箱が移された所に疾病が起る

6・1～7・1 神の箱、遂にイスラエルにかえる

7・2～17 士師としてのサムエル

サムエルを中心とした記事に戻る。彼は全イスラエルの神政的支配者、あるいは士師として描かれている。神の箱がキリアテ・ヤリムにある間、サムエルはイスラエルに向かって大いに悔改めるべきことを説いた。彼の勧告に従って民は「異なる神」を捨てた。そこでサムエルは民をミズパに集め、会衆は公にその罪を告白した。その時にペリシテ人がイスラエルを襲撃したが、サムエルの祈りにより主の助けで彼らを大破潰走させ大勝利を得た。サムエルの生存中、ペリシテ人が再び国を侵すことがなくなった。サムエルはイスラエルの主権者となった。本章の記事は、のちに記されている事実と相違する所が少なくない。資料を異にしていると考えられる。

7・2～6 イスラエルの悔改めとサムエルの改革

7・7～12 ペリシテ人の敗北

7・13～17 戦勝の結果

8・1～12・25 王国の建設

この5章は、キシの子サウルを立ててイスラエルの最初の王としたことを記す。君主政体は、神を唯一の王と仰ぐ神権政体と矛盾するものであるとの印象を受ける。他面において、他国民の如く、イスラエルに王政を樹立するのは神の是認し

給うものであることが明示されている。

8・1～9 民衆、王を要求する

8・10～18 王のならわし

8・19～22 民衆の執拗

9・1～10・27 サウル、サムエルに油そそがれ、王となる

9・1～10 サウル、父のろばを捜す

9・11～24 サウルは先見者を訪ね、サムエルに好遇される

9・25～10・1 サムエル、サウルに油を注ぐ

10・2～16 サウルの運命を定める三つの徴

「一群の預言者」…初期の預言者で、後世の倫理的宗教を唱道した預言者とは趣を異にしている。音楽によりその宗教的熱情を鼓舞し、陶醉状態になり預言する。

「預言しながら」…当時の預言者が宗教的熱情をもつて歌いかつ語る状態を指す。

「手当りしだいに……」…機をみて事をなせ、との意。本節は前後の記事の連絡を乱すもので、後世の挿入と認められている。

「新しい心を与えられた」…「心」は知情意の全体を総括したもので、ここでは、主の霊によりサウルの性格が全く一新されたことを言う。

10・17～27 サムエル、民をミツパに集めサウルを王に選ぶ

本項は、もと8・1～22に連続すべきものである。この部の著者は8章における如く、王政は主の拒み給うところであるとの観念を表わしている。

11・1～15 サウルはアンモン人を破り、ヤベシ・ギレアデを救う

12・1～25 サムエルの告別の辞

ギルガルにおける集会はイスラエルの民族史に一時代を画するものである。この集会は、ミツパの集会で定めたことを批准し、かくして遂に士師の時代は終り、新王国が始まったのである。サムエルは、預言者としての感化と権威はなおも持続していたが、士師としての職を辞任するために、この厳粛な告別の言葉を民に述べた。本項は、10・24に連続すべきものである。

13・1～14・52 ペリシテ人との戦

13・1～23 独立戦争の開始

13・1～7 ペリシテの支配からの脱却

13・8～15a サウル排斥さる

サウルの不従順とその罰（前後の連絡を乱すので挿入と解されている）

13・15b～18 ペリシテ人の侵入

13・19～23 イスラエルにおける武器の不足

本項はイスラエル人がペリシテ人に武装解除されたことを示すためのもので、19

ゝ22節は挿入と解されている。

14・1ゝ15 ヨナタンの功績 物語は本筋に戻り、ヨナタンの勇敢な行為を記す

14・16ゝ23 ペリシテ軍の敗北

14・24ゝ35 サウルの無謀な禁食とヨナタンの違反

14・36ゝ46 禁制(タブー)を犯した者がヨナタンであることをくじで発見する

14・47ゝ52 サウルの戦略の大略とその家系

15・1ゝ35 サウルの不従順——退けられる

16・1ゝ13 サムエルひそかにダビデに油注ぐ

第16章、17章にはダビデを読者に紹介する記事が少なくとも三つある。16・1ゝ、

16・14ゝ、17・12ゝ。これらは相互に関係のない別個の史料によるものと考えら

れる。相互に矛盾する記事が少なくない。↓16・21ゝと17・55ゝ

16・14ゝ23 サウルの王宮におけるダビデ

「武器を執る者」…信頼する従者

17・1ゝ18・5 ダビデ、ゴリアテと戦う

この箇所本文は、たいそう複雑な問題をはらむとのこと。第一に、原文は邦訳のように63節からなっているが、七十人訳ではそのうち30節以上も削除されている(17・12ゝ31、41、50、55ゝ58、18・1ゝ5)。もう一つは、16章にはダビデは既にサウルの宮中に来た如く記してあるのに(20ゝ23)、本項(17・1ゝ18・5)ではダビデは単に父の羊を牧する若者で(17・15ゝ)、サウルは彼を全く知らないことである(17・56ゝ)。これは史料の出所を異にするためであるのか、あるいは編者が複雑な記事を挿入したことに基づくのであるのか、明確に説明し難い、とのこと。

「身の丈6キュピト半」…1キュピトは約45センチ。
「重さ5000シケル」…1シケルは11・424グラム

17・11…もとの物語は17・11から17・32へと続く

ゴリアテの挑戦が40日間(17・16)も続いたとは思われない。

17・12ゝ31 ダビデ、陣営に遣わされる

本項の記事は七十人訳にはない。この記事はベツレヘムのエッサイの家庭に戻る。

17・28 「あなたのわがままと……」…

兄の叱責であるが、神に油注がれた者にこう言うことはできない。この記事は、

16・13の事実を全く知らないで記したものである。

17・32ゝ39 ダビデ、ゴリアテの挑戦に応じる

本項は直接17・11に連続すべきもの。

17・40ゝ54 ダビデ、ゴリアテをたおす

17・55ゝ18・5 ダビデ、サウルの宮廷に招かれる。



本項は16・14～23の記事と全く矛盾している。七十人訳にはない。17・12～31の如く異なる史料より取って挿入されたものと考えられる。

18・6～30 サウル、ダビデをねたむ

本文には挿入句が入っているの、前後の関係を不明確にする箇所が少なくない。

18・6～16 ダビデの声望

18・10～11は、七十人訳にはない。

18・17～19 ダビデとメラブ

18・20～30 ダビデ、ミカルと結婚する

七十人訳では、本項の記事は16節に続いている。

19・1～20・42 ダビデ、サウルに追われる

本項は種々の異なった記事より成り、相互の連続もない。さまざまの問題を含む部分である。

19・1～7 サウルとの一時的和解

本項は、20・1～39を要約したような趣があるが、20・2と矛盾する所がある。

19・8～10 サウル、ダビデを刺そうとする

18・10～に記されている事件と同じものである。本項もどこの記事に連続すべきものであるか明らかではない。

19・11～17 ミカル、ダビデを逃がす

本項の物語はダビデがミカルをめとった「その夜」(↓18・27)のことを記すものである。そうとすれば、18・29aに続く。

19・18～24 ダビデ、ラマのサムエルのもとにのがれる

本項は10・10～13の記事をとってこれを異なる場合に適用したもので、挿入であると解されている。

20・1～10 ダビデ、ヨナタンに相談する

20・2

「殺されることはありません」は、19・2と相反する。これは史料の相異から来る。

20・5

「三日目の夕方まで」…七十人訳には「三日」の文字がない。20・19「三日目には」と調和させるための挿入と解される。

20・10

「だれがわたしに告げる……」…本句は、ヨナタンが直接ダビデに告げるのは安全でないことを示す。20・10は、20・18に連続するとき記事が明らかになる。

20・11～17 ヨナタンの懇願

本項は前項の記事と連続せず、ヨナタンとダビデの位置が転倒して語調が前後と

等しくないので、後の追加といわれる。

20・18ゝ23 ヨナタン、サウルの意向を知らせる方法をダビデに示す

20・18は、20・1ゝ10の記事に連続するものである。

20・24ゝ34 ヨナタン、サウルの意向をダビデに通じる

20・35ゝ39 ヨナタン、ダビデに警告する。

20・39は、20・42bに連続するもので、20・40ゝ42aは挿入句と認められている。

20・40ゝ42 ヨナタンとダビデの別離

21・1ゝ28・2 ダビデの亡命生活

この8章はダビデがサウルの宮中を去った時から、サウルの宿敵ペリシテ人の中に難を避けざるを得なかった時に至るまでの、いわゆる亡命生活を記したものであるが、その記事は連続したものではない。

21・1ゝ9 ダビデ、ノブにのがれる

21・10ゝ15 ダビデ、ガテにのがれる

22・1ゝ5 アドラムにおけるダビデ

本項は直接20・42あるいは21・9につづくべきもの。

22・6ゝ23 サウル、ノブの祭司の一族を殺す

23・1ゝ13 ケイラにおけるダビデ

23・14ゝ29 サウル、ダビデを捕えようとする

24・1ゝ22 ダビデの雅量

25・1ゝ44 ダビデとアビガイル

26・1ゝ25 ダビデの雅量

27・1ゝ28・2 ダビデ、アキシのもとに逃れる

28・3ゝ31・13 ペリシテ人との戦いとサウルの戦死

28・3ゝ25 サウル、エンドルの口寄せの女を訪れる

29・1ゝ11 ダビデ、ペリシテの君たちに退けられる

本章および30章は28・2に連続するもので、ダビデの生涯中の出来事を記載した史料から採ったものといわれる。

30・1ゝ31 アマレク人、チグラを侵略し、ダビデ、これを回復する

31・1ゝ13 サウルの戦死